俳都松山
Haiku Capital Matsuyama

俳句ポスト365

2018−2019

作品集

http://haikutown.jp/

制作
松山市

俳都松山　俳句ポスト365　2018−2019 作品集

── 掲載回一覧 ──

		投句募集期間	選句結果掲載日	投句数／投句人数
第188回	薇（ぜんまい）	2018/1/25 ～ 2018/2/7	2018/3/12 ～ 2018/3/16	5279 句 ／ 1136 人
第189回	春潮（しゅんちょう）	2018/2/8 ～ 2018/2/21	2018/3/26 ～ 2018/3/30	5552 句 ／ 1132 人
第190回	三色菫（さんしきすみれ）	2018/2/22 ～ 2018/3/7	2018/4/9 ～ 2018/4/13	5798 句 ／ 1193 人
第191回	金盞花（きんせんか）	2018/3/8 ～ 2018/3/21	2018/4/23 ～ 2018/4/27	5540 句 ／ 1172 人
第192回	蟻（あり）	2018/3/22 ～ 2018/4/4	2018/5/7 ～ 2018/5/11	5905 句 ／ 1221 人
第193回	初鰹（はつがつお）	2018/4/5 ～ 2018/4/18	2018/5/21 ～ 2018/5/25	5712 句 ／ 1173 人
第194回	老鶯（おいうぐいす）	2018/4/19 ～ 2018/5/2	2018/6/4 ～ 2018/6/8	5738 句 ／ 1189 人
第195回	虹（にじ）	2018/5/3 ～ 2018/5/16	2018/6/18 ～ 2018/6/22	6259 句 ／ 1284 人
第196回	赤潮（あかしお）	2018/5/17 ～ 2018/5/30	2018/7/2 ～ 2018/7/6	5358 句 ／ 1168 人
第197回	海の日（うみのひ）	2018/5/31 ～ 2018/6/13	2018/7/16 ～ 2018/7/20	6067 句 ／ 1248 人
第198回	夏草（なつくさ）	2018/6/14 ～ 2018/6/27	2018/7/30 ～ 2018/8/3	7193 句 ／ 1354 人
第199回	踊（おどり）	2018/6/28 ～ 2018/7/11	2018/8/13 ～ 2018/8/17	6197 句 ／ 1273 人
第200回	鰯雲（いわしぐも）	2018/7/12 ～ 2018/7/25	2018/8/27 ～ 2018/8/31	7063 句 ／ 1382 人
第201回	稗（ひえ）	2018/7/26 ～ 2018/8/8	2018/9/10 ～ 2018/9/14	5529 句 ／ 1187 人
第202回	無月（むげつ）	2018/8/9 ～ 2018/8/22	2018/9/24 ～ 2018/9/28	6737 句 ／ 1349 人
第203回	無花果（いちじく）	2018/8/23 ～ 2018/9/5	2018/10/8 ～ 2018/10/12	6778 句 ／ 1377 人
第204回	色鳥（いろどり）	2018/9/6 ～ 2018/9/19	2018/10/22 ～ 2018/10/26	6794 句 ／ 1370 人
第205回	胡桃（くるみ）	2018/9/20 ～ 2018/10/3	2018/11/5 ～ 2018/11/9	6825 句 ／ 1438 人
第206回	炬燵（こたつ）	2018/10/4 ～ 2018/10/17	2018/11/19 ～ 2018/11/23	7771 句 ／ 1472 人
第207回	重ね着（かさぎ）	2018/10/18 ～ 2018/10/31	2018/12/3 ～ 2018/12/7	7622 句 ／ 1427 人
第208回	枇杷の花（びわのはな）	2018/11/1 ～ 2018/11/14	2018/12/17 ～ 2018/12/21	7250 句 ／ 1371 人
第209回	雪兎（ゆきうさぎ）	2018/11/14 ～ 2018/11/28	2019/1/14 ～ 2019/1/18	7787 句 ／ 1410 人
第210回	鮃（ひらめ）	2018/11/29 ～ 2018/12/12	2019/1/28 ～ 2019/2/1	6911 句 ／ 1333 人
第211回	うらうら	2018/12/13 ～ 2019/1/9	2019/2/11 ～ 2019/2/15	8257 句 ／ 1516 人
第212回	菠薐草（ほうれんそう）	2019/1/10 ～ 2019/1/23	2019/2/25 ～ 2019/3/1	7784 句 ／ 1493 人

第188回　２０１８年３月12日週掲載

薇（ぜんまい）

《春》ゼンマイ科の多年草シダ。山林や野原に数本ずつ自生する。山菜として有名で、先端が白い綿毛に覆われて渦を巻いた、まだ柔らかいうちの若葉や茎を折り取って、干して貯え食用にする。

天

薇の巣や耳塚に千の耳　　小泉岩魚

「耳塚」とは、戦国の時代、敵の首の代わりに切りとった耳を埋めた塚のことです。討ち取った大将格はその証拠の首を持って来いと言い、後の雑兵は数の功労だという理屈のなんと無残なことか。

そしてその耳も数え終われば無用となる。「耳塚」の一語はそんな時代の背景と共に光景も描き出します。「耳塚」があると伝えられる谷は「薇の巣」。薇がうにょうにょ生えている場所だけど、なんだか落ち着かない気配に満ちています。「薇」の形はたしかに「耳」の形。「耳塚」に埋まった「千の耳」の怨念に押し出されるように「薇」が生えてくるのかもしれないと思うと、ますます怖ろしくなります。鬱蒼と暗く湿った匂いが、我が鼻腔に伝わります。

地

ぜんまいの渦のほどけてわゐうゑを　　ひろ志

「ぜんまいのの字ばかりの寂光土／川端茅舎」と詠む俳人もいれば、その「渦」がほどけてしまうと「のの字」ではなく「わゐうゑを」になってしまうよと笑う俳人もおります。歴史的仮名遣いの「ゐ」「ゑ」のカタチも楽しいね。

ぜんまいの頭ほぐしてみたくなり　　dolce（ドルチェ）@地味ーず

綺麗に巻いてるのに「ほぐしてみたく」なるのが俳人と子どもの好奇心というヤツでしょうか。「ぜんまい」をじっと観察しつつ、我が頭もほぐしての一句です。

薇のほどけるといふ一仕事　　井上じろ

薇の頭をほぐしたいという俳人もいれば、「薇」になりきって「ほどける」という行為がどんなに大変な「一仕事」であるかと想像する俳人もいます。「○○といふ一仕事」という類型を巧く使いこなしているあたりが、ベテランの技です。

薇の空のびやかに天皇陵　　あつちゃん

「天皇陵」は宮内庁の管轄。一般人の踏み込めない陵には、鬱蒼と暗い場所もあるのでしょう。見上げた「空」の明るさを「のびやかに」と表現。蕨とは違って湿っぽいところに育つのが「薇」。その湿っぽさと春の空の明るさを一気に映像化している点が巧い作品です。

ぜんまいに包囲されたる月見山　　葦たかし

「月見山」は月見を楽しむための山でしょうか。暦学（昔の天文学）の学者たちが観測した小さな丘かもしれないなあ、とも想像しました。夜の「月見山」の周りは「ぜんまい」の宝庫だと分かっている。月に誘われるように、今宵「ぜんまい」はゆらゆらと育っていくのでしょう。

ぜんまいや円周率は3で良し　　山香ばし

「ぜんまい」から「円周率」を発想した句は幾つもあったのですが、「円周率は3で良し」と言い切ったのがいい。勢いよく、不揃いに育つ「ぜんまい」たちが見えてくるようで、楽しい一句です。

ぜんまいや空ぶん殴る形して　　隣安

「ぜんまい」のあの形を、握り拳に見立てる発想の句も沢山届いたけど、それを拳といわず「空ぶん殴る形」としたに点にオリジナリティがあります。ただの殴るではなく「ぶん殴る」という大袈裟も徒手空拳の味わい。

座禅だか寝ているんだか薇長ける　　雪うさぎ

「座禅だか寝ているんだか」は、座禅を組んでいる人物に対するつぶやかきもしれないし、長けてしまった「薇」の擬人化かもしれない。上五中七の口調が「長け」てしまった「薇」への嫌みのようにも聞こえて、それもまた愉快な一句です。

ぜんまいと嘘つきそうな顔の山羊　　ギボウシ金森

「ぜんまい」を採りに入った山里で「山羊」に出会ったのでしょうか。「山羊」ってどっか信用できない顔つきに見えるよね。「嘘つきそうな顔」が人間ではなく「山羊」であるという着地に俳味があります。

ぜつたいは淋し薇食うてみよ　　鈴木牛後

「ぜつたい」に約束するよ、「ぜつたい」に逢いに来るよ、「ぜつたい」に決まってるじゃないか。そんな言葉の虚しさを「淋し」と口にするとまた淋しさが募る。

そんなこの句の眼目は後半の展開。「薇食うてみよ」とおどけてみせているのか、静かに諭しているのか。「薇」は淋しい食物かもしれないと思わせられた春です。これも天に推したかった作品です。

第189回　2018年3月26日週掲載

春潮（しゅんちょう）

《春》春になって暖流である黒潮が流入すると、水温が徐々に上がるとともに、潮の色は淡く澄んだ藍色に変わる。また、干満の差も大きくなり、遠浅の海では豊かな干潟が広がる。

天

春潮やしばし縮みてあきつしま　クズウジュンイチ

干満の差が大きいのが「春潮」だといわれていますが、科学的なデータでは最低潮位を記録するのが春なのだそうです。「あきつしま」つまり日本の国が最も広がるのが春。豊かな潮の流れをここまで俯瞰できるのが俳人の目なのだなあと、感心し共感しました。

広がる干潟では潮干狩り、岩場では磯遊びを楽しむ人たちもいます。やがて少しずつ潮が満ち始める時間がくれば、人々は三々五々帰り支度を始めます。一句を読み終わったとたん、「縮み」始める「あきつしま」というグーグルアース的映像から、干潟や岩場へと焦点が絞られ、そこにいる人々の動きや潮の干満が早送りの映像で見えてくる。こんな「春潮」の描き方あるのかとしばし感嘆の一句。

地

春の潮遅れて細い流れあり　としなり

船で航行していると、素人の目にも、潮の動きが見えてきます。潮と潮とがぶつかる渦潮もあれば、この句のように太い潮の後に「細い流れ」を見て取ることができる。「春の潮」を一物仕立てで切り取ろうと観察した努力作。「遅れて」という描写にリアリティがあります。

邑君の網に春潮ゆたかなり　くらげを

「邑君（むらぎみ）」とは村の代表者を指しますが、農民のかしら、漁夫の長という意味もあります。この句の場合は、網元でしょうね。古風な言葉が、古き時代の手触りを伝えます。引き上げる「網」から溢れるのは豊かな海水、生き物を育む豊かな「春潮」。この日の漁の「ゆたか」もありありと想像できる作品です。

春潮や備蓄タンクの浮きさうな　トポル

いきなり現代です。「備蓄タンク」がはるかに見えるのでしょう。作者は「春潮」に乗って走る船の上でしょうか。「浮きさうな」という描写が、春の駘蕩たる空気を表現しているかのよう。「春潮」と「備蓄タンク」との体感的遠近感も感じ取れます。

校舎から春潮眺めゐる白衣　はまのはの

「校舎」から「春潮」の流れが眺められるのですから、高台にある「校舎」の3階とか4階とかの教室でしょう。理科室を思ったのは下五「白衣」の一語からの想像か。春休みでしょうか、離任の決まった日でしょうか。「眺めゐる」にささやかな時間経過と春の愁いも読み取れます。

春潮の夜の河口の鳩羽鼠　井上じろ

「鳩羽鼠（はとばねずみ）」は紫色をおびたねずみ色。「春潮」の満ちてくる「夜の河口」の色をこう表現しました。「春」という季節の感触が「鳩羽鼠」の色として匂い立ってきます。助詞「の」を畳みかけながら映像を作り、一句の眼目である「鳩羽鼠」の色に焦点を絞っていくあたり、巧い構成です。

側溝のごぼりと噎せて春の潮　遠音

河口から遡る「春の潮」は、狭い「側溝」にも流れ込みます。この海水の動きは、「春の波」でもなく「春の海」でもなく、やはり「春の潮」と表現されるべきでしょう。「ごぼりと噎せて」という擬人化がリアリティのある音を聞かせてくれます。同時投句「まほろばは陸（くが）春潮の尽きざりし」は、大きな潮の流れ。どちらも秀句です。

春潮や冬の屍の仄臭し　理酔

暖かくなってきた海辺には、独特の匂いが立ち込めます。その磯の臭さに酔ってしまう人もいます。この句を読んだとたん、そうかあの臭いは「冬の屍」なのかと思い、いやいや実際に冬のうちに死んだものの一部が打ち上げられているのか……とも思いました。下五「仄臭し」が、春という季節を大づかみしつつ、虚の嗅覚を漂わせる。さすがの一句というべきでしょう。

月は膿み人魚は匂う春の潮　三重丸

さらに虚に踏み込んだ句もありました。「春の潮」の生暖かい臭さは、「月」をぼったりと膿ませ「人魚」をなまめかしく匂わせるというのです。この句も「春の海」でもなく「春の波」でもない、「春の潮」だから表現できる世界を生み出しています。

船底に咲うフジツボ春の潮　柝の音

春に咲く花はたくさんありますが、「船底」には「フジツボ」も咲くのだよという発想の楽しさ。「咲う」は「わらう」と読みます。このように書かれると、「フジツボ」とはまさに「咲う」ように育つ生き物だなあと、納得しきりです。

本当に椰子の実一つ春の潮　くりでん

♪名も知らぬと遠き島より～という歌そのままに、「本当に椰子の実」が「一つ」流れていることに驚く、その楽しさ。私も全く同じ光景に出会ったことがあり、船べりから「あ

の歌そのままや～」と笑った覚えがあります。が、それを俳句にするということを忘れていたよ！（笑）作者くりでんさんの軽やかさに乾杯ですね♪

第190回　2018年4月9日週掲載

三色菫

さんしきすみれ

《春》紫、黄、白の三色が混じる菫の意味で、一般的にはパンジーと呼ばれる。蝶の翅を広げたような形をした、ヨーロッパ原産のスミレ科の一年草。日本には江戸末期に渡来した。

天

どの色の薬で眠い三色菫　　多事

「パンジー」ではなく「三色菫」という呼名が意味と意図を持って機能している句として、これを「天」に推したいと思います。

「三色菫」といえば家庭、学校、公園の春の花壇を彩る代表的な花。一見、明るくて可愛い花ですが、よくよく眺めると生き物の貌のようにも見えてくるし、あれでいて種と根には毒を持っているらしいし、色々な切り口を持つ季語なのだなあと再確認しました。

なんでこんなに眠いんだろう。新しく貰ってきた「薬」のせいだろうか。一体「どの色の薬」のせいでこんなに眠いんだろう。あの色の薬か、この色の薬か。色とりどりの「三色菫」を眺めながら朦朧と思いを巡らせているのです。「三色菫」が春の風にゆっくりと揺れる様子を見ていると、まるで催眠術をかけられているような気分にもなります。下五「三色菫」の字余りも、なんだか眠たげです。

地

三色菫校歌覚える宿題す　　山香ばし

入学をすると「校歌」を覚える「宿題」が出されるのですね。校庭の花壇か、家庭のプランターか。「三色菫」はメトロノームのように揺れています。「校歌」の格調高く晴れがましい歌詞を眺めつつ、音をとっていく。「校歌覚える宿題」を完璧にやり遂げるには、もう少し時間がいりそうです。

三色菫こども食堂灯されし　　Mコスモ

「こども食堂」という言葉が市民権を得る時代です。「三色菫」が足元を彩る「こども食堂」の灯ともし頃。夕飯を食べに集まってくる子どもたちで賑わい始めます。「三色菫」は「こども食堂」の善意のように、優しい色で咲いているのでしょう。上五に季語を字余りで置いて、中七下五でリズムを整えています。

三色菫新駅のがらんだう　　クズウジュンイチ

完成間近の「新駅」でしょうか。中はまだ「がらんだう」で、人もいないけれど、外には「三色菫」のプランターが並べられているのかもしれません。「三色菫」の賑やかさと「新駅」の閑散とした無彩色とを対比させた一句。７５５のリズムで、合わせて17音となります。

アウシュビッツの門に三色菫かな　　あめふらし

こんなところにも「三色菫」は並べられているのでしょう。虐殺の悲惨な遺産として残る「アウシュビッツ」。そこを訪れる人たちを明るい「三色菫」が迎えます。上五を「アウシュビッツの」と7音の字余りで置いて、「門に三色菫かな」で12音構成する。7音の季語「三色菫」の使い方としてこんなやり方もあります。

三色菫密かに飛ぶを知らぬとでも　　雪うさぎ

「三色菫」はあの花びらを使って飛び立つに違いないという発想の句は沢山寄せられましたが、この句の工夫は後半の語りです。「三色菫」は人間に知られないように「密かに」飛んでいるつもりなんだろうけど、それをこの私が「知らぬとでも」思っているの？　心の奥で嗤う魔女の台詞みたいな作品です。

三色菫鉄琴の音に醒めたばかり　　Y雨日

「三色菫」は音符みたい音譜みたいという発想の句も沢山あったのですが、そこからさらに「鉄琴」という楽器を想定したところにオリジナリティがあります。「三色菫」は「鉄琴の音に醒めたばかり」の貌のように見えたという感覚に惹かれます。「三色菫」を鳴らすと「鉄琴」の音がしそうにも思えてきました。

犬はもう飼わないパンジー咲きやがる　　大塚迷路

こちらは「パンジー」の一句。愛犬が死んでしまった悲しみ。「犬はもう飼わない」と決めたのに、今年も春がきて「パンジー」が咲いた。あのあたりの「パンジー」にイタズラばかりしていた愛犬のことを思い出す。「犬はもう飼わない」って決めたのに、「パンジー」は明るく「咲きやがる」んだ。そんな作者の気持ちが、読者の心に一気に流れこんでくる作品です。

同時投句「定年と妻と三色菫かな」もほのぼのと佳い。

風にパンジー警察はまだ来ない　　蟻馬次朗

追突でもしたのか、はたまた追突されたか。１１０番通報したが「警察はまだ来ない」という微妙な時間を想像しました。

路肩の細長い花壇には手入れされた「パンジー」が「風に」揺れている。そんな光景が「風にパンジー」という措

辞だけで見えますし、「警察はまだ来ない」で状況がありありと理解できます。17音でここまで伝えられるから、俳句って面白い！

パンジーにしゃがめぬ我も修羅なのだ　　くりでん

「パンジーにしゃがめぬ我」とは、花壇の世話も出来ないという意味でしょうか。あるいは可愛く咲いた「パンジー」を愛でる心のゆとりがないという意味でしょうか。手入れのできてない「パンジー」の花壇を思ってもよいし、逆に美しく咲きそろったプランターを想像してもよいけれど、「パンジーにしゃがめぬ我」こそがまさに「修羅」なのだという嘆きに、読者の心はハッと動きます。「パンジー」という明るい響きから一転しての「修羅」という響きのなんと生々しいことでしょうか。

パンジーも美味しいかしらグレーテル　　ふじこ

様々な色で咲く「パンジー」は、いかにも美味しそうなキャンディーみたいです。が、下五「グレーテル」という人名が出たとたん、様相は一転。だめよ、これは魔女の企みかもしれないわ！　種と根には毒があるらしい「パンジー」からの発想でしょうか。楽しませてもらった一句です。

入り口にパンジー奥にチンパンジー　　京野さち

楽しんだという意味では、これも楽しかった！「三色菫」ではなく、敢えて「パンジー」を選ぶ理由は、まさにこの音。「入口にパンジー」が楽し気に迎えてくれて、その「奥」には「チンパンジー」が鎮座している檻がある。音の楽しさと共に、映像もしっかり描けています。

第191回　2018年4月23日週掲載

金盞花（きんせんか）

《春》キク科の一年草。冬でも温度の高いところや温室で栽培され、菊に似た鮮やかな橙色または黄色の花をつける。花期が長く丈夫で、切り花として重宝される。

天

おひさまが凸なら凹のきんせんか　　薄荷光

「金盞花」と太陽はベタな取り合わせなのに、ここまで単純化すると、むしろそれぞれの形が個性として認識されるのだなと、愉快になりました。「おひさま」という巨大な球体が「凸」で、「きんせんか」という小さな花が「凹」。この二つがお互いに対峙して、熱を放ち、熱を受け取っているのです。

「金盞花」の「盞」は、杯（さかずき）を意味します。金色の杯のような花。その特徴を「凹」の一字で表現してしまう発想が楽しくも見事。「おひさま」「きんせんか」の平仮名表記も、その楽しさにマッチしています。金盞花の栽培は、太陽の溢れる海に程近い地が多いと聞くと、太陽を照り返す海の匂いもしてきそうな一句です。

地

花桶や金盞花ある方を買ふ　　まどん

私の生まれた地方では、墓には樒（しきび）という木の枝を供えます。「金盞花」が仏花であるという認識がなかったので、お墓に金盞花が飾られているのを見る度に、なんで？と思ってました。逆に、関東から嫁いできた句友は、愛媛のお墓には木が挿してある！と驚いたそうです。

「花桶」を持って、仏花を買いに行く。いく種類かの束が売られているのだけれど、やはり「金盞花」が入っている方を買うという行為が、自然なものとして描かれているところに味わいがあります。

金盞花讃岐一国晴れの国　　きのと

栽培地としての「讃岐」へのご挨拶句。名詞を畳み掛けての三段切れではありますが、それを逆手にとってリズムを巧く作り上げました。漢字が並んでいるのに、重い気分ではない。まさに晴れ晴れとした句になっているのは、「讃岐」を言祝ぐ「晴れの国」という言葉の力に違いありません。

金盞花群れゐてふためきの磁針　　ウェンズデー正人

「金盞花」は結構好き嫌いが分かれる花ではないかと思います。見ようによっては明るくエネルギッシュだし、見ようによっては鬱陶しく不穏な気持ちにもなる。そこがまたこの花の特徴です。

「ふためき」とは動詞「ふためく」の連用形が名詞化したもの。【①ばたばたと音をたてる。②あわてる。騒ぎ立てる。】の意味があります。「金盞花」が群れ咲いている所に来ると、「磁針」が「ふためき」始めたというのです。「ふためきの磁針」は、「金盞花」に対する作者の心のざわめきでもあるのでしょう。

金盞花ようこそぜつぼうの国へ　　とおと

「ふためきの磁針」という受け止め方をさらに突き詰めていくと、「ぜつぼうの国」という言葉もでてくるのですね。「金盞花」という花の色や形状に対する違和感かもしれませんし、仏に捧げる花が群れ咲いている光景への心理的拒絶感かもしれません。「ようこそ」と迎えいれる温かい言葉は、続く「ぜつぼうの国へ」という措辞で、一転します。

「金盞花」には申し訳ないが、私も、こっち派の感じ方をしてしまうものですから、この句は天に推したいほど魅力的でした。

足萎への汗の匂ひぞ金盞花　　克巳

一読、子規の短歌を思い出しました。「足なへの病いゆてふ伊予の湯に飛びても行かな鷺にあらませば」 足が萎えて歩くことができない病気が治ると伝えられている伊予の湯（故郷の道後温泉）に飛んで行きたいものだなあ。もし、自分が鷺だったなら……という意味です。この短歌は、松山市立子規記念博物館前にも歌碑として刻まれています。

「金盞花」は臭い花なので、その匂いを詠んだ句もありましたが、この比喩は強烈にして生々しい。まるで子規が現代に生きていて、「足萎へ」である自分の「汗」を自嘲しつつも、明るく笑い飛ばしているかのように思えました。「金盞花」という季語の持つ二面性をうまく使いこなした作品です。

斜陽の金盞花児らの掌には鍵　　エリザベス

夕日の栽培畑の光景でしょうか。一面に金盞花が植えられている公園かもしれません。「斜陽の金盞花」は、夕日の色と一体となっていく様子を描写しています。

傍らには「児ら」が佇み、それぞれの「掌には鍵」が握られている。鍵っ子たちもまた「斜陽」の光の中にあります。こんな句に出会うと「金盞花」は淋しい花でもあるのだなと、認識を新たにします。

幸せの金盞花咲く黒い家　　なみは

かたやこちらは「幸せの金盞花」とストレートな措辞で始まります。が、後半一転して「黒い家」となる展開にハッとします。「黒い家」とは文字通り、黒い外壁の家なのか、心理的な黒なのか、喪の家なのか、読みは行く通りかに広がっていきます。「幸せの金盞花咲く」というシアワセそうなフレーズは、皮肉にも哀しみにも受け止められていく、言葉の二重構造。

アンドレはナポリの漁師金盞花　　樫の木

一転して、なんと明るい「金盞花」でしょう。「アンドレはナポリの漁師」という人物の出現で、「金盞花」は海の光と風をまとった存在として咲き広がります。「金盞花」の庶民的なイメージも「ナポリの漁師」という土地柄や職種に似合っています。「アンドレ」は胸板の厚い、日焼けした好青年か。漁師としての矜持をもった中年のおじさんか。そんなことを想像してみるのも楽しい。

ひらひらと走り来る豚金盞花　　月の道

「豚」と「金盞花」の取り合わせは意外でしたが、「ひらひらと走り来る豚」が、我が眼前にありありと出現したことに驚きました。絵本の世界のようでもあり、放し飼いの豚がいるような外国の農家のようでもあり。「金盞花」は食べちゃだめ！と追いはらう、エプロンおばさんまで想像できて、これまた楽しかった。

定年にも力要りけり金盞花　　大塚迷路

「定年」退職ですね。長年のお勤めご苦労様でしたと挨拶されても、今日から毎日が日曜日ですね！なんて言われても、うーんなんか違うんだよね……と思ってしまう。「定年にも力要りけり」という呟きの正直さ。庭の「金盞花」と共に過ごす日々もまた、それなりに「力要りけり」ですものね。共感の一句。

金盞花縁というのは努力やで　　まどん@最近胸に響いた言葉。

オマケというのもなんですが、「定年」の句を眺めていると、まどんさんの同時投句がほのぼのと思い出されてきました。

「縁」というものは、偶然だったり仏や神の配慮だったり。有り難い出会いでありましたと感謝するものというイメージがあります。が、「縁」を継続していくのは「努力やで」と人生の先輩に諭されたのかもしれません。努力なくして繋がり続ける「縁」はない。含蓄の深い言葉です。派手なような地味なような「金盞花」は、この格言に似合うなあと感銘を受けました。

第192回　2018年5月7日週掲載

蟻（あり）

《夏》アリ科の昆虫の総称。非常に種類が多く様々な生態を持っており、女王蟻を中心に多数で独自な社会生活を営む。詩歌の季題としては比較的新しく、大正以降であるといわれる。

天

蟻吸ひつ蟻を放ちつ穴しづか　　阿蘇三鷲三ピーマン

「蟻」がしきりに出入りする「穴」の様子を、「穴」自身が吸い、「穴」自身が放つのだと見て取った詩的把握が秀逸です。「穴」そのものが一つの大きな生き物であるかのように感じ取る。それはまさに、この生き物の生態であり大きな特徴でもあります。

蟻の巣は、横穴と縦穴を繋いで無数の部屋が広がっています。食料貯蔵庫、幼虫を育てる部屋、女王蟻の居室等、全てが種の保存という一つの目的のために、機能的に意図され配置されているのです。ひょっとするとこれらは蟻自身の考えで行われているのではなく、「穴」というモノが創造神の如き意図を持って「蟻」たちを操っているのではないか。そんな想念から生まれた一句かもしれません。

地

光る蟻光らぬ蟻を押しのける　　とりとり

季語「蟻」に遭遇すると、俳人たちはじっと観察しない

ではいられなくなります。「光る蟻」「光らぬ蟻」は、その観察眼がとらえた見事な詩的把握です。てかてかと黒光りしている蟻は、若い蟻か、はたまた旺盛な働き盛りの蟻か。かたや、艶を失っている蟻は動きも鈍く、精気に欠けるように感じたのでしょう。「光らぬ蟻」を死んだ蟻と読む可能性も否定はできませんが、蟻たちが右往左往と餌の周りに群がってくるその中に「光る蟻」「光らぬ蟻」がいると読んだほうが、蟻の生態がリアルに見えてくるかと思います。

そして下五の複合動詞「押しのける」。どちらもの蟻の様子を活写しつつ、犇めき合う何百もの蟻も想像させる見事な描写です。

（以上ここまで、気持ちはダブル「天」なので、選評は同じ300字で書かせていただきました。）

蟻突つけば突ついた棒によじ登る　　ギボウシ金森

イタズラするつもりで、群がっている「蟻」を「棒」で突いたのでしょう。すると「蟻」たちは平然とその棒をよじ登ってくるのです。そのまま棒を握っている手元まで登ってくるのではないかという小さな恐怖。子どもの頃に体験した人もいるのではないでしょうか。むろん、私も経験があります。そこが共感を誘うのです。

うつとりと蟻が骸を舐めてゐる　　クズウジュンイチ

我が肉眼で「蟻」の貌がはっきりと見て取れるわけではないのですが、何かの「骸」に集まっている「蟻」を見ていると確かに恍惚たる表情をしているように感じる。その感覚を表現した「うつとり」という言葉に惹かれます。下五も、嚙る、食べるではなく「舐めてゐる」がまさに、うっとりの感覚。

ぎちと咬むたび上がりをり蟻の尻　　このはる紗耶

こちらは咬んでいます。「ぎち」というオノマトペが、獲物を咬み切る強い歯の力を思わせます。何よりもスゴイのは、「咬むたび」に「蟻の尻」が上がるという肉体的連動を発見したこと。いや、そこに連動があるに違いないと詩的に把握したところが見事です。

三日目にやうやう細る蟻の列　　あいむ李景

たった十七音の俳句に時間経過を詠み込むのは至難の業ですが、いともカンタンにやってのけています。「三日目」ということは、一日目からこの「蟻の列」を眺め続けているということ。三日間をかけて「やうやう細る」のですから、今回の獲物はどれだけの大きさだったのか、どんな獲物だったのか。想像が広がります。

「やうやう」細ったものの、さらに四日目も五日目も、最後の一欠片まで蟻たちは運び続けるのでしょうね。

蟻運ぶ蟲のパーツの2から6　　笑松

「蟻」たちが運んでいるのは「蟲」です。その死骸を運ぶことのできる大きさに切り離して運ぶ、というのは当たり前ですが、「パーツの2から6」と表現したところが愉快。解体にも「蟻」たちならではの、手順とコツがあるんだろうなと改めて思いました。

パーツ1は、もう運び終わったのかな。大きすぎるのでは、これは最後なのかな、と色々想像も楽しめました。

埃浮くテレビの台へ蟻がきて　　こなぎ

こんな光景を見たことがあるなというアルアル感。昭和の頃の「テレビ」は立派な「台」がついていました。そこはいつ見てもうっすらと「埃」がたまっていたように思います。なぜ「テレビの台」へ「蟻」が集まってきてるんだろうと、怪訝な気持ちで覗き込んだことがあるような気がする。それが昭和という時代の手触りにもなっている一句です。

蟻一匹ギプスの闇を覗きけり　　露砂

「蟻一匹」のクローズアップから、「ギプス」が出現し、蟻の視線として「ギプスの闇」という表現が引き出されてきます。下五「覗きけり」は蟻自身になりきっての巧い擬人化。一体この隙間はなんだろう？と蟻は首をかしげているのでしょう。好奇心の強い蟻が「ギプスの闇」に入っていったら、この人大変だよ！と想像すると、ますます面白くなりました。

蟻を焼くコールタールの匂ひ立つ　　キッカワテツヤ

一読、子どもの残酷な遊びを思い出しました。虫眼鏡で太陽光を集め、黒い「蟻」を焼いて遊ぶというヤツです。私はやったことはありませんが、男の子たちがやってるのを横目で見た記憶が蘇ってきました。その時の匂いが、作者の記憶に刻まれているのではないか。そうだ、あれは「コールタール」の匂いだった、と。無邪気な残忍さもまた「コールタール」の匂いがする行為なのかもしれません。

涙腺はすでに燃えかす蟻をみる　　Y雨日

なんで泣いているのかは分かりません。死別の涙か、失恋の涙か。とにかく泣いて泣いて泣いて「涙腺」は乾き果て、目の周りはぼったりと充血し、それでも泣きたい。でももう一滴もでない。中七「すでに燃えかす」が独自の感覚であり、詩的リアリティを持った表現でもあります。

涙の尽きた「燃えかす」の「涙腺」を持った目で、ぼんやりと足下の「蟻」を眺める。こんな日の蟻を私も眺めていたことがあったに違いない、という強い追体験をさせる力のある作品です。

第193回　2018年5月21日週掲載

初鰹（はつがつお）

《夏》黒潮に乗って回遊する鰹は、地域によってはもっと早い時期から出回る場合もあるが、一般的には初夏とされる。現代でも人気の魚だが、特に江戸期においては、ほかの魚と違って「初」の字を冠するほどに待望していた。

天

初鰹気の強さうな火の立ちぬ　蘭丸結動

私の故郷愛媛県愛南町の深浦港は、県内唯一の鰹の水揚げ基地。初鰹の時期には鰹祭りも行われ、市場では目の前で初鰹をさばいてくれます。待ちに待った「初鰹」です。ここでしか食べられない通称びやびや鰹の刺身は驚きの美味ですが、やはりたたきも食したい。

ドラム缶に「火」が熾ります。節に切った鰹が運ばれます。表面を炙ったあと一気に冷やす氷水の盥も準備万端。客は列をなし、「火」の熾る様子を見つめます。一掴みの藁が投じられます。一気に炎が立ち上がります。「気の強さうな火」です。新鮮な鰹の表面を炙るこの火力が、鰹のたたきの命。「初鰹」の喜びと市の賑わいが「気の強さうな火」という措辞の向こうに見えてくる一句です。

地

棟上げのお客百人初鰹　うに子

「棟上げ」に招いた「お客百人」に振る舞うことができた「初鰹」。うまくその日に水揚げがあれば、と願っていた「初鰹」。新築の喜びが「初」の一字の喜びに重なります。賑やかで目出度いお祝い句。

黒潮の年輪けふの初鰹　くらげを

「黒潮」にのってやってくる「初鰹」。近年は黒潮のルートが変わり、それに伴って鰹の通る道も変わってきてるのだそうです。「黒潮」が育てる「年輪」を刻み「けふの初鰹」があがります。

しみじみと箸の国なり初鰹　まるちゃん2323

この美味さをどう表現したらよいのかと思いつついただく「初鰹」。手にした箸をしみじみ眺め、「しみじみと箸の国」の民であるよと思う。「箸の国」に生まれた喜びと共に食す「初鰹」です。

洋上のぶっかけ飯や初鰹　a・柝の音

「初鰹」を一番に堪能するのは漁師さんたち。取れたての鰹をさばいた「ぶっかけ飯」。醤油とみりんの付け汁につけた鰹をご飯の上にのせるヤツかな。「洋上」ならではの美味なる漁師丼です。

初鰹下戸には見えぬ漁労長　野地垂木

「漁労長」とは、漁船で漁獲作業の指揮・監督をする人。「初鰹」の群を釣り上げた後の慰労の酒でしょうか。冷静にして頼もしい「漁労長」がまさかの「下戸」という意外もまた、愉快な俳句の種です。

組合長が取材へ見せる初鰹　河合郁

こちらは「組合長」です。「初鰹」が水揚げされたというニュースの「取材」にやってきたテレビクルー。漁業組合の「組合長」はここぞとばかりに「初鰹」を掲げます。初物ならではの笑顔です。

初がつを銀座に真砂女ありしころ　あつちゃん

俳人鈴木真砂女は、銀座で「卯波」という店を切り盛りしていました。今はその店もなくなった「銀座に真砂女ありしころ」という呟きは、「初がつを」の季節になると思い起こされる感慨でしょう。

初鰹新入幕の派手に負け　山香ばし

贔屓にしていた力士が「新入幕」となった嬉しさ。応援にも力が入りますが、なんと初日に土がついてしまう。「派手に負け」の潔さは明るい負けっぷり。「初鰹」を差し入れて景気づけするか！

鎌倉は蘇芳に明けて初松魚　どかてい

「蘇芳」とは、紫がかった赤色。「蘇芳」に明ける「鎌倉」の海。かつてこの沖で獲れた「初松魚」の話が『徒然草』にも書かれています。今も昔も変わらぬ「初松魚」の喜び、鎌倉の夜明けの美しさ。

第194回　2018年6月4日週掲載

老鶯（おいうぐいす）

《夏》夏になり成長した鶯のことで、文字どおりの老いた鶯をいうものではない。春に人里近くで鳴いていた鶯が、繁殖期である夏には営巣を行う山中で鳴くようになるが、その声は非常に高らかで流麗である。

天

老鶯や日照雨に甘く薫る山　多々良海月

「老鶯」とは老いた鶯ではなく、夏の鶯。大きな声で流麗

に見事に鳴きます。この季語の難しさは「老」の一字の意味。つまり春を告げる鶯ではなく夏を謳歌する鶯であることをどう表現するかです。

掲出句は「日照雨に甘く薫る山」で夏らしさを描写。「日照雨（そばえ）」とは文字通り、日が照っているのに降っている雨。太陽を弾くようにきらきら降る雨に、青葉の山は「甘く」匂い立ってきます。「薫る山」という措辞は風薫る季節を思わせ、「甘く」は濡れた青葉の匂いを感覚的に捉えます。「老鶯」がいかにも老鶯らしく声高々と鳴く度、山々はますます「甘く薫る」のです。下五きっぱりとした名詞止めは上五「や」と呼応。一句をきりっと引き締めました。

地

老鶯の声と声との間の昏み　　牛石

「老鶯」の老成した鳴きっぷりをじっと聴いていると「声と声との間」に溜があることに気づきます。それを「昏み」と表現した点にオリジナリティとリアリティがあります。思うがままの鳴き声は成熟した「老鶯」ならではのもの。聴覚だけで一物仕立ての句をものにするとは、大した耳をお持ちの方だと敬服いたしました。

老鶯の鳴き損じたる損じたる　　大塚迷路

「上手の手から水が漏れる」なんて慣用句がありますが、「老鶯」のくせに、今のはどうみても鳴き損じたな、という一句。「損じたる損じたる」は、なじるというよりは、からかうようなニュアンスでしょうか。飄々たる味わいです。同時投句「老鶯や思ひ通りの鳴き納め」は、正攻法の捉え方。これらも聴覚だけの一物仕立てです。

山が鳴くやうに老鶯鳴きにけり　　玉木たまね

「老鶯」は夏の山全体に響き渡るように鳴きます。その様子は、まるで「山が鳴くやうに」聞こえるよというのです。擬人化の比喩が、さりげないリアリティをもって表現されている点を強く褒めたいですね。下五「けり」も堂々たる納め方です。

老鶯や春たべてこえきらきらに　　むらさき（5さい）

「老鶯」は夏の鶯だということをお母さんに教えてもらったのかな。「春」という季節を食べたから「こえ」が「きらきら」してるんだな、という感じ方がいいですね。「きらきらに」という下五の余白に、再び「老鶯」の声が聞こえてくるかのようです。

老鶯や千年水をもらい水　　こぶこ

「老」の一字を「千年」という言葉のイメージと取り合わせました。「千年」前からここに湧いている名水でしょうか。「千年水」を分けてもらうために来てみると、今年の「老鶯」が見事に鳴いているよという一句。「もらい水」という言葉の、謙虚と感謝もいい。

老鶯や山のホテルの獨逸パン　　三重丸

「老鶯」の老成した気分と、「獨逸」という字面が似合います。ちょっと堅めだけど噛んでると味が出てくる、ライ麦の黒っぽいパンを想像しました。避暑で訪れる「山のホテル」でしょうか。「老鶯」の鳴きっぷりもまたこの風物詩。朝の珈琲をいただきつつ、「老鶯」の声に耳を傾けます。

老鶯の遠音や明智藪を風　　このはる紗耶

「明智藪（あけちやぶ）」とは、山崎の戦いで敗北した明智光秀が落武者狩りにあって亡くなったとされる場所。「老鶯の遠音や」と強調した後の「明智藪」の一語が、読者をかの時代にワープさせます。「老鶯の遠音」を運んでくる「風」は「明智藪」をかすかに揺すります。音の遠近感を見事に表現しています。

老鶯や猿楽遺跡の弥生土器　　ころん

「猿楽遺跡」は、愛媛県久万高原町の標高1、100m前後の山陵にあります。西日本で最も高い位置に立地する弥生集落の一つなのだそうです。「猿楽＝奇術や滑稽な物まねなどの演芸」そのものは、奈良時代に唐から伝来した散楽（さんがく）を母胎に作り出されたものだと、辞書には解説してあります。弥生の頃の遺跡が、やがて猿楽を披露する場として使われるようになったのだろうかと、想像が広がります。様々な時代を経て「老鶯」たちも命を繋いでいく。時間と空間を繋いで「老鶯」は流麗に鳴き続けます。

宿り木の渦を老鶯語りあふ　　ウェンズデー正人

「老鶯」の声を聴いていると、いったい何話しているんだろう？と想像し始める人もいます。「宿り木」の解釈は二つ。ヤドリギ科の常緑低木と読めば、大木に寄生する「宿り木」となります。あの老木に寄生している「宿り木」の数は半端じゃないぞ。まるで「渦」巻くように繁っているではないか、という読みになります。

そして、もう一つの「宿り木」の解釈は、ある鳥がとまる木、という意味。梅に鶯、橘に時鳥という類いですね。自分が止まっている「宿り木」、たぶん老梅でしょう。その幹の「渦」について「老鶯」たちが語り合っているという意味になります。

二つの意味を共に成立させているのが、季語「老鶯」の持つ磁場。こんな使い方もあったかと楽しませてもらいました。これも天に推したかった作品です。

山姥は老鶯の舌ばかり喰ふ　　蜂喰擬

「山姥」の句もよく見ますが、「老鶯の舌ばかり喰ふ」という山姥には初めてお目にかかりました。「老鶯」の声がすると、風よりも早く走って「老鶯」を捕まえ、その「舌」だけを引っこ抜いて食べるのでしょう。「舌」を抜かれた「老鶯」たちは鳴くことができなくなる。鶯の声が聞かれなくなっていく季節感を、こんなファンタジーホラーで表現でき

るのか、と吃驚。俳人たちの想像力は果てしないなあ～と賛嘆いたします。

第195回　2018年6月18日週掲載

虹（にじ）

《夏》夕立の後などに、太陽と反対側の空に弧状にかかる七色の帯。空中の水滴粒子による太陽光の屈折や分光で生じる。その美しさと、すぐに消えてしまうはなかさが古来より愛されてきたが、季題としては比較的新しい。

天

鷲の虹野ねずみの虹シャチの虹　　be

対句表現を重ねた三段切れという手法ですが、なんと鮮やかにさまざまな虹が見えてくるのでしょう。鷲は高い位置から虹を見ます。真っ正面から虹を見られるのが鷲の目線です。虹をくぐれそうな高さにいるのが鷲です。かたや野ねずみは地上。首をぐんと上げて、立ち上がらんばかりに虹を見上げているのでしょうか。あれはなんだろうと首を傾げているのかもしれません。シャチは海です。波を蹴ってジャンプした瞬間に捉える虹。広い広い海原を駆けるシャチに、海の虹はさらに色を濃くします。そして雨上がりの空は、次第に青を取り戻していくのでしょう。絵本のようでもありノンフィクションの映像のようでもあり、実に豊かな世界を持った作品です。

地

百葉箱閉じてノートに記す虹　　TAKO焼子

理科研究のクラブ活動でしょうか。気象台の職員でしょうか。四角い白い「百葉箱」を閉じて、「ノート」に数字を記入する。その端に、いま頭上にかかっている「虹」のことを記します。これもまた「虹」という季語との出会い。ささやかな季語体験です。

一斉に野球部虹へ飛び出せり　　あつちゃん

練習中の夕立でしょうか。試合が一時中断していたのかもしれません。やっと雨が上がり、急ぎのグランド整備が終わり、待ちかねていたように「一斉」グランドに駆け出す「野球部」たち。下五「飛び出せり」が勢いのある描写です。

湯沸し器点いてひだるし夕の虹　　エイシェン

就業終了時間が近づく夕方。その日職員が使ったカップや来客に出した湯飲みを洗うために「湯沸かし器」に火をつけます。「ひだるし」とは、空腹という意味。仕事終わりの疲れもこの言葉ににじみます。「夕の虹」の淡さも想像できる一句です。

母親が憲法だったころの虹　　かをり

どの家庭でも、最初は「母親が憲法」です。お母さんに許可を求め、お母さんがダメと言えば、それはもうダメなのだという「ころ」を作者は懐かしみつつ、切なくも思っているのでしょう。「母親」の介護をする、庇護の下に置くという「ころ」が、作者の現実となっているから、このような感慨を抱くのではないかと思います。

吊橋の揺れをゆたかに虹の立つ　　ぎんやんま

「吊橋」のど真ん中まで来て、空に「虹」見つけたのです。あ！虹、と指させば、一緒に渡っていた人たちも、虹だ虹だと声を上げます。中七「揺れをゆたかに」という描写の巧さ。下五を「虹の立つ」とゆったりと言い止めた点もよいですね。

虹の両端は不幸な家ばかり　　ぐ

断定することで詩を生み出す手法です。虹がかかっているのを見られるのは、虹から離れているから。虹の根っこ、つまり「虹の両端」にいると虹は見られないのだ、という寓意も含んでいます。「不幸な家ばかり」は自虐とも、諦めとも、突き放す言葉とも読めるのもこの作品の特徴です。

昆虫の粗き交合さつと虹　　クズウジュンイチ

「昆虫」たちの「交合」は、今のがそう?!と驚くほど粗雑だというのです。命を生み出すために愛を育む「交合」という言葉を裏切る「粗き」という一語の斡旋が巧いですね。「さつと」は「粗き交合」の描写でありつつ、「虹」の描写ともなり得ている点も褒めたい作品です。

虹を生むゆびつてきつとかういふ指　　とおと

愛の句でしょう。恋人の「指」を見つめているのでしょうか。なんて素敵な指なんだろうと思うのは、音楽を奏でている指、絵を描いている指、愛を確かめ合う指。さまざまな指を思うたびに、この句の世界は豊かになっていきます。「きつと」「かういふ」が、まさに目の前にその指があり、その指に触れているかのような効果をもたらします。愛唱句の一つになりそうな作品です。

さうでした虹に入れぬ色でした　　よだか

「さうでした」という独白のなんと切ないことでしょう。「虹に入れぬ色」とは、もしかしたら作者自身を比喩しているのかもしれませんし、自分ではどうしようもない宿命をかかえている人物への思いかもしれません。「さうでした～色でした」という口語のたたみかけるリズムもまた、切ない響きです。

同時投句「古本の乱歩臭つてうすく虹」は、古書店か古い図書館か。この句の世界にも惹かれます。

密林に濡れたる虹の卵あり　笑松

「密林」の激しいスコールがいきなり止んだ瞬間を思いました。降る時も急にして強烈だけど、止む時も急にして鮮烈。「密林」の一語は、一瞬にして読者をワープさせます。その密林のどこかには「虹の卵」があるに違いないという発想が素敵！　これから現れるに違いない虹を「虹の卵」という表現で想像させる手法も素敵！「濡れたる」という描写のリアリティが「虹の卵」の存在を鮮やかにします。

虹二重ゴメスは珈琲園を買った　ウェンズデー正人

読んだ瞬間に、こうきたか！と笑ってしまいました。上五「虹二重」というと、有名句「虹二重神も恋愛したまへり　津田清子」がすぐに浮かんでくるものですから、その世界からのギャップにやられました（笑）。誰か知らないけど「ゴメス」という名は南米を思わせますし、「珈琲園を買った」はゴメス氏の苦労と成功の一代記を想像させます。ゴメス氏の生涯をもっと知りたい気にもなります（笑）。彼の「珈琲園」に架かる「二重虹」。なんと鮮やかな人生と虹。

第196回　2018年7月2日週掲載

赤潮（あかしお）

《夏》海水中のプランクトンの異常発生で潮が赤くなる現象。帯状の広範囲に及び、酸欠状態となった海水が養殖漁業に甚大な被害をもたらすため、漁協を中心に大がかりな対策がとられる。

天

赤潮を貫く雨の太きかな　星埜黴円

愛媛県西南部の村で育った私には、赤潮はなじみ深いものです。赤潮の来る日は空気も澱んでいました。湾に押し寄せる赤潮は饐えた匂いを放ちます。堤防に及んだ赤潮に石を投げると、投げた石の大きさの分だけ、穴が空いたように海面が見えます。少し濁ってはいるけど赤潮の下にはいつもの海があるんだなと思ったものです。

赤潮に雨が降り出します。雨粒の大きさの分だけ、一面の赤潮に小さな穴が空きます。そしてすぐに閉じていきます。思いの外に大きな雨粒は、赤潮を貫いては赤潮に溶けていきます。次々に空く雨粒大の穴。それを凝視し「雨の太きかな」と表現できる俳人の観察眼。地味で静かな句ですが、ひたひたと怖い句でもあります。

地

赤潮の一ヶ所波になりきれず　牟礼あおい

「赤潮」の一物仕立て。赤潮の「一カ所」が「波になりきれず」臭く澱んでいるのです。赤潮によって海が死んでいくかのような感覚を、「一ヶ所波になりきれず」と淡々と描写している点に静かな迫力があります。

赤潮と鉄臭そうな桟橋だ　ゆみづき

「赤潮」は赤といいつつ、様々な色合いがあります。オレンジ色、赤色、赤褐色、茶褐色等がありますが、美しいとは言いかねる濁った色合いです。それはまさに「鉄臭そうな」色合いでもあります。錆びきった「桟橋」に寄せる「赤潮」もまた鉄臭い。

モノクロ映画より赤潮の匂ひ　輝　龍明

「モノクロ映画」はドキュメンタリーでしょうか。「赤潮」に眉を寄せる漁師たちが映っているのかもしれません。色もない映画の奥から「赤潮の匂ひ」を感じ取るということは、作者は「赤潮の匂ひ」を生身の感覚で知っているということ。「モノクロ」と「赤」の対比も巧い一句です。

ラヂヲざりざり赤潮を進むとき　一阿蘇二鷲三ピーマン

「ラヂヲ」の後の「ざりざり」は、ラジオの雑音であり「赤潮」の感触でもあるのでしょう。「赤潮を進むとき」とありますから、船体に触れる「赤潮」が「ざりざり」していると読むべき。「進むとき」という下五の表現が、生々しい感触です。

赤潮やささくれ剥けば肉透けて　小泉岩魚

「赤潮や」と強調した後、カットが切り替わります。指の「ささくれ」が気になるものだから一気に「剥いて」しまうと「肉」が「透けて」みえたというのです。「赤潮」の濁った赤と、指先の「肉」の透きとおった赤との対比。赤潮もまた生きるものなのだという思いも過ぎります。

赤潮のにおい金の無心の電話鳴る　村松縁

「赤潮のにおい」がある日はきっと「金の無心の電話」がかかってくる。断りたいが断れない。思い切って断ってみると、どんよりと暗い気持ちが残る。あの日も「赤潮」が来ていたなという嗅覚の記憶が蘇る。そして「電話」が「鳴る」。

酒臭き母が耳打ち赤潮来たよ　24516

「酒臭き母」は昼から飲んだくれているのか。夜の商売から戻ったところか。「酒臭き母」の記憶の中に「赤潮」がある。「耳打ち」の一語が、酒の臭さと熱っぽいくすぐったさ、嫌悪とエロチック等を想起させます。「赤潮が来たよ」という囁きが腥い。

赤潮のひた寄る浦の情事かな　トポル

先ほどの「酒臭き母」を描いたかのような一句。「赤潮」の匂いに封じられているかのような「浦」は、漁に出ることも出来ないまま黙しています。自力ではどうすることもできない「赤潮」への苛立ち、焦燥。「情事」には「赤潮」

の匂いが似合うのかもしれません。

赤潮やそういや山も怒っとる　　くりでん

漁師のつぶやきでしょうか。何日も去らない「赤潮」に異変を感じ取っているのでしょう。「そういや山も怒っとる」は山の噴火と読みました。転変異変の予感が渦巻く浦。危機感が募ります。

赤潮へマジ切れラーメンへバター　　司啓

「赤潮へマジ切れ」とはストレートな怒りの表現。漁に出られない漁師の憤りか、海を楽しむつもりだったのにという旅行者の嘆きか。怒ると腹が減る。腹が減って入ったラーメン屋。「ラーメンへバター」を溶かし込む。美味いが腹が立つ。腹が立つが美味い。

第197回　2018年7月16日週掲載

海の日（うみのひ）

《夏》7月第3月曜日の祝日。明治天皇が東洋巡幸の帰途に横浜港に帰着された7月20日を記念して昭和16年より設けられた記念日。平成8年より国民の祝日となり、その後の法改正により現在の日程となった。

天

海の日のカーナビ恐るべく寡黙　　蟻馬次朗

最近の「カーナビ」は恐るべき進化を遂げており、右へ曲がれ、左は一方通行だ、検問が近い、そろそろ休め等、大きなお世話だと思うほどにきめ細やかな指示をしてくれます。その小うるさい「カーナビ」が今日は「恐るべく寡黙」なのです。なぜ寡黙かは、上五「海の日」なる季語の力によって想像できます。

長い長い海岸線に沿って車を走らせています。片側の海は夏の光を弾き、冷房の利いた車内には心地よい静けさが広がります。都会の喧噪を離れ、「海の日」の海を味わう大人の休日。「カーナビ恐るべく寡黙」という些事が、季語によって詩に変質します。

「恐るべき」ならば「寡黙」自身の性質ですが、「恐るべく」は「寡黙」が「在る」というニュアンス。この選択も的確です。

地

司厨長口伝の海の日のスープ　　トポル

「司厨長」とは、船舶で食事のことを担当する人の中のリーダー。「海の日」の特別メニューは「スープ」。直接「口伝」を受けたレシピにて作るスープは絶品なのでしょう。この設定そのものが、明治天皇巡行の気分も匂わせるところが、さすが。これも「天」に推したい作品でした。

海の日をひとでのように過ごすかな　　神山刻

「海の日」は祝日。その一日を「ひとでのように過ごす」という比喩が愉快です。ただ動かないということか、海辺のデッキチェアに座りっぱなしなのか。はたまた、波打ち際にて何をするでなくじっと濡れているのか。いろんな「ひとで」が見えてきて可笑しい。

海の日に疲れクラゲの図鑑繰る　　静里秋希

今度は、「クラゲ」です。これも季語だけど、本物のクラゲではなく「図鑑」に載ってるクラゲだから、季語としての力は弱くなっていますし、敢えてカタカナで書く理由も分かります。

「海の日に疲れ」という措辞に、共感。美しいクラゲや恐ろしいクラゲに見入りつつ、我が体もクラゲになったかのような、楽しい疲れを感じているのでしょう。

性欲を持てあまし海の日は凪　　あるきしちはる

「海の日」が比較的新しい夏の祝日であることを思えば、「性欲を持てあまし」のような剥き出しの措辞も受け止めるのだなあと感心しました。「性欲をもてあまし」ていることと「海の日の凪」は何の関係もありませんが、どちらにも苛立ちを抱え、心は荒れているのです。

海の日の瓶の手紙はＣｏｋｅの香　　だいふく

「瓶の手紙」という句材は、それなりにありますし、やってみるとロマンチックになりすぎたりしますが、「Ｃｏｋｅの香」という感じ方に、オリジナリティとリアリティがあります。コカコーラのカッコイイＣＭ映像が見えてくるような一句。

海の日の魚の骨のような橋　　ちま（4さい）

たぶん、ちま（4さい）は「橋」を見て「魚の骨みたい！」と言ったのだと思います。それをお母さんが兼題「海の日」と取り合わせてくれたに違いないと。小さな子どもたちへの俳句指導は、子どもたちの言葉に耳をかたむけることから始まります。そして、詩になりそうな言葉をつぶやいた時、「いいねえ！今の言葉、いい俳句の種だよ！」と大げさに褒めてやって下さい。子どもたちは、大人に褒められるとやる気になります。

「海の日」に見つけた「魚の骨のような橋」は、読者の脳内にありありと映像化されます。比喩がそのまま映像を描く。子どもたちの直感的比喩は楽しいものばかりです。

うみのひやちょこぽんはちょっとだけわかい
とうい（3さい）＠代筆：登るひと

この句も同じです。とうい（3さい）は、大好きな「ちょこぽん」を食べて「これ、ちょっとだけわかいね」と感じたのです。焼きたてだったのか、焼き色がちょっと薄かったのか、

いろんな「わかい」があるかと思います。「うみのひ」と取り合わせられることで、子どもたちの呟きが詩になっていく。やがて、子どもたちは、季語と取り合わせることも自分でやりたがる日がきます。それまでは、子どもたちの言葉に耳をかたむけてやって下さい。

海の日やミルクに浸すかもめぱん　柳児

大人もパンを食べています。「海の日や」と強調したあとに出てくるのが、「ミルク」の白。そこに「浸す」のが「かもめぱん」というのが楽しいですね。カモメの形をしているのか、カモメ屋さんの名物パンなのか。海の明るい朝の光景。

海の日やけふも塩吐く臼あらん　ウェンズデー正人

なぜ海水がしょっぱいかというと、塩を吐き続ける石臼が海底に沈んでいるのだ、という昔話があります。「海の日」がくる頃になると、海で遊ぶ季節になると、きまってこの昔話を思い出すのかもしれません。「けふも」の「も」、「塩吐く臼あらん」の「あらん」など、言葉の斡旋も巧みです。

海の日や魚も人もほおに肉　卯MOON

煮付けた「魚」を丁寧に食べていると、「ほお」にも小さな「肉」があるのに気づく。「人も」の「も」が、我が頬にある肉の存在を生々しく認識させます。

明るく健康的な「海の日」のイメージからすると、少々ギョッとさせる内容ですが、「ほおに肉」や「塩吐く臼あらん」のような発想も「海の日」は受け止めるのだなあと、改めて認識させられました。

第198回　2018年7月30日週掲載

夏草（なつくさ）

《夏》夏になり勢いよく茂った草。一面を覆う草も、一本一本の草も、生命力がみなぎり、滴るような緑にそまる。

天

夏草や亀甲墓は産むかたち　あまぶー

「亀甲墓」とは沖縄県にみられる墓様式で、亀の甲羅を伏せたような形の屋根が特徴的な墓です。死をくぐって生まれ変わるという信仰的思想は、胎内くぐり（狭い洞窟を抜けることで肉体と魂が浄化し、生まれ変わる）等にも見られますが、「亀甲墓」の「かたち」にもその思想が反映されているようです。

上五「夏草や」は、夏草の旺盛なエネルギーを強調し、灰色の「亀甲墓」に映像のカットを切り替えます。「亀甲墓」の入口はまるで膣のように暗く開き、その構造は子宮のように奥へと広がっています。「亀甲墓」を具体的なモノに例えず「産むかたち」と象徴的に比喩したことで、「夏草」はますます青臭く匂い立つかのようです。

地

刃毀れの鎌に夏草絡みおり　いつつばし

雑草を刈る仕事は根気と体力が勝負。「刃毀れの鎌」を打ち振って格闘していると、いつしかその「鎌」に「夏草」が絡みついてくる。「夏草」のしぶとさにため息をつきつつ、ひとまず休憩するか。

夏草の端に生家が捨ててある　クズウジュンイチ

もう誰も住んでいない「生家」が「夏草」まみれになっているという句にはお目にかかりますが、「夏草」の端っこに「生家」が「捨ててある」という逆転の措辞に、説得力があります。「捨ててある」という他人事のように突き放した言い方にも、作者の心情が読み取れます。

夏草や思ったよりもヤギデカい　シュリ

絵本で知ってる「ヤギ」は可愛いんだけど、実際に出会った「ヤギ」に対する「思ったよりも」「デカい」という率直な感想に、思わず笑ってしまいました。「夏草」をちぎってやろうとすれば、たぶん思ったより凶暴なことにも気づくんだろうな（笑）。

参謀は祖母夏草の束の山　ぐ

「夏草」を刈る仕事の「参謀」は「祖母」であるという措辞が愉快。たぶん司令官は祖父なんだろうけど、具体的作戦は「参謀」である「祖母」なくしては進まない。「夏草の束の山」という映像を最後に残すあたりの配慮が巧い一句です。

夏草を平泳ぎして灯台へ　小石日和

「夏草」の中を歩き出しています。「夏草」の丈は胸のあたりまであるのでしょう。まるで「平泳ぎ」で進んでいるかのようなだという感触に共感します。「灯台へ」で一挙に広がる光景。「夏草」の緑と「灯台」の白の対比もいいですね。

夏草や野は炎症を起こすかに　神山刻

「夏草」はどんどん蔓延り、草いきれは強く鼻腔を刺します。まるで「野」が「炎症」を起こしているかのようだという感覚が鋭い作品。「夏草」の強さが、「野」を蝕んでいくかのような印象に、強く惹かれます。これも天に推した作品です。

夏草や蛇口ひねればぬるい水　　中岡秀次

手入れされなくなった公園を想像しました。古い「蛇口」をひねると「ぬるい水」が出てくる。その湿さに夏を感じ、「夏草」の猛々しい臭いをかぎとっているのでしょう。ボタボタと落ちる「ぬるい水」に現場証明があります。

夏草やルオーのキリストに祈る　　大西主計

「ルオーのキリスト」の素朴で力強い表情は、たしかに「夏草」に似合うなと納得させられます。「夏草や」という季語への強調と「ルオーのキリストに祈る」というフレーズ。両者の言葉の質量が絶妙に釣り合っていると感じます。

夏草を抜いたらアスファルト割れた　　東洋らいらん

「アスファルト」の端っこのあたりの粗雑な部分なんだろうけど、「夏草」を抜いたら、なんと「アスファルト」が割れてくっついてきた!という驚きを、あっけらかんと書いているところにリアリティがあります。口語の効果も十分発揮されている一句。

第199回　2018年8月13日週掲載

踊（おどり）

《秋》俳句において「踊」といえば「盆踊」のことをいう。盆に招かれてくる先祖の霊や無縁の霊を供養して送るために人々が集まって踊り歌う。

天

恍惚の口より佛出て踊る　　杏と優

一読、空也上人像の口からでている六体の「佛」を思いました。日本史の教科書に載っていたのは六波羅蜜寺の「木造空也上人立像」。大きな頭と痩せた脚。首から鉦をぶら下げ、右手に撞木、左手に杖。唱えた念仏が口から出ると佛の姿になっていく、という木像です。

踊ることも念仏を唱えることも、続けていると次第に「恍惚」としてきます。恍惚とは、心奪われてうっとりするさま。舞踏的恍惚と宗教的恍惚が一致していく、それが季語「踊」の本質なのでしょう。死者の魂を念いつつ踊り続ける姿は、まるで「恍惚の口」から吐き出された「佛」が踊っているかのよう。やがて「佛」と我は渾然一体となり、「踊」の輪は輪廻のごとく回り続けるのです。

地

踊りけり一遍さんの背を追うて　　樫の木

空也上人の影響を受けたのが、一遍上人。踊り念仏を通して、人々に「南無阿弥陀仏と唱えれば往生できる」と教えました。「踊りけり」と詠嘆したあとの「一遍さんの背を追うて」は、一種の比喩。一遍上人の背を追うかのように踊り続けるよ、という詠嘆です。この句もまた、舞踏的恍惚と宗教的恍惚を描こうとした一句でしょう。

踊終へあちらの闇は掴めさう　　ヒカリゴケ

季語「踊」は、亡くなった人の魂を迎え、送るためのものですから、「闇」という言葉を取り合わせた句はたくさんあります。が、「あちらの闇は掴めさう」という表現には、季語「踊」の現場で感知する「闇」への心理的手触りがあります。恍惚の残る指先にひやりと触れる妖しさ。「あちら」とは黄泉へと続く闇なのかもしれません。

煙草火の櫓にいくつ踊の夜　　ウェンズデー正人

こちらは実景です。広場の真ん中に組み上げられた「櫓」の上には太鼓を叩く男たち。櫓下辺りにも世話役の男たちが屯しているのでしょう。幾つも見える「煙草火」は「踊の夜」の印象として、心に刻まれている光景なのかもしれません。「煙草火」だけで「踊の夜」を描こうという意図が成功している作品です。

長身の住職未だ踊り下手　　ギボウシ金森

お父さんのあとを継いだ若い「住職」ではないかと読みました。「長身」なのですぐに「住職」だと分かるんだけど、なんとも「未だ」に「踊り」だけは「下手」。でも、その下手を喜ぶ檀家衆の笑い声も聞こえてくるよう。愛されている「住職」なんでしょうね。

女らはゆの字となつて踊るかな　　くらげを

人の様子を平仮名に喩える発想の句は時折りみかけますが、「踊る」人の姿を「ゆの字となつて」と表現した点に詩的リアリティがあります。「女ら」という複数の「ゆの字」が、くねりくねりと静かに踊る光景が、ありありとみえてきました。

盆踊りあれは隣の養子とか　　ツーちゃんの恋人

おや、見かけない顔が踊ってるけど、あれは誰だろう。「あれは隣の養子」らしいよ、という噂話がひそやかに交わされているのでしょう。「養子」には二通りの意味がありますが、娘が養子をとったという意味に受け取るほうが、明るい俳諧味があるかと思います。

踊の輪大音量にゆがみけり　　みくにく

大きな大きなスピーカーが設置されている辺りにくると、あまりのうるささに思わず「踊の輪」が歪んでしまうというのです。よく観察してますね。「大音量に」の「に」は、それが原因でという意味。助詞の使い方も的確です。

鳴り響く盆地の底を踊りけり　　くりでん

「盆地の底」という表現はよくありますが、「鳴り響く盆地の底」という音の厚み、「盆地の底を踊りけり」という作者の位置の描き方が巧い作品です。特に、「盆地の底を」の「を」という助詞の効果をよく理解しています。助詞を知ることは、表現の巧さにつながります。

陸奥の闇に蒸されて踊りけり　　ラーラ

「踊」と「闇」ですが、「陸奥の闇」となると、闇そのものが性格付けされるという効果を持ちます。「陸奥」のお盆も蒸し暑いのでしょう。「闇に蒸されて」という表現に皮膚感としてのリアリティがあります。汗と人いきれに蒸される「陸奥の闇」です。

踊つたり飲んだり足をくじいたり　　よだか

亡くなった人の魂を迎え、送るのが「踊」だけど、この夜の記憶といえば踊りに「踊つたり」、羽目を外して「飲んだり」、調子に乗って跳ねすぎたり酔っ払って「足をくじいたり」。だらだらと「〜り」を重ねるリズムが、一句に内容に似合ってます。切れのない型を選んだ作者の工夫が成功しました。

第200回　2018年8月27日週掲載

鰯雲（いわしぐも）

《秋》気象用語でいう巻積雲のことで、小さな雲片がさざ波のように規則的に連なる。名称の由来は鰯の群れのように見えるからとも、この雲が出ると鰯がよくとれるからともいわれる。

天

トランポリン沈む鰯雲へ吠える　　よだか

「鰯雲」は穏やかに悲しげに切なげに詠まれることが多いものですから、この句に出遭って驚きました。まずは「トランポリン沈む」という表現が巧いですね。ぐぐっと「沈む」トランポリンの上の体。沈めば沈むほどジャンプは高く高くなります。何度も何度も深く沈みながら一気に直上する。「トランポリン」のギシギシという軋み。深く沈む膝の圧力。空中に放り上げられる体の興奮。それはあたかも「鰯雲へ吠える」かのようだというのです。平らかに広がる「鰯雲」、直角に切り込んでいく身体感覚。手が届きそうな「鰯雲」だからこその「吠える」という感知。「鰯雲へ」向かってという助詞の選択も的確。新しい「鰯雲」の魅力を表現してくれた作品です。

地

朝っぱらから鰯雲です爽快です　　雪うさぎ

「朝っぱらから」一体なんだと思えば「鰯雲」。こういう朝に、嗚呼しらぬまに秋になっているなと感じるのが、秋というもの。朝の空気に冷気の芯が生まれ始めている。それに気づく朝のなんと「爽快」なことか。「爽快です」と言い切る作者の表情も見えてくる一句です。

鰯雲南の端が取れてゐる　　クズウジュンイチ

「鰯雲」を一物仕立てにした句は他にもありはしましたが、別の雲でもいけるのではないかという中途半端なものが多かったようです。この句は、広がる「鰯雲」らしさを「端が取れてゐる」と表現。いきなりそこで、ちぎり取られたような形状になっていることも映像として描かれています。「南」という方角が一句を暗くしないところもいいし、「取れてゐる」というぶっきらぼうな表現も似合ってます。

いわし雲買います黒猫百貨店　　霧子

「いわし雲」からイワシ→食べる→猫という具合に連想していく句も沢山あったのですが、その発想にちゃんとオリジナリティを加えて、楽しい詩にしてくれてるのがこの作品。「いわし雲買います」という口語からの展開が楽しい。「黒猫百貨店」は、まるで宮沢賢治の世界にありそうな店ですね。

いいひとといわれるいたみいわしぐも　　ざうこ

「いわしぐも」という季語は、自分の心と対話する時に、その心を受け止めてくれるのだなあと改めて思います。「いいひとといわれる」けど、決して「いいひと」ではないことを、自分自身が一番知っている。その「いたみ」は、ジワジワと「いわしぐも」のように広がっていきます。

いわし雲心という字書きました　　さな（6才）

「心」という字はバランスが取りにくい。心そのものもバランスが取りにくい。見上げれば「いわし雲」は悠々と広がっています。小さなことにこだわってしまう私の心。何度も何度も「心という字」を書いていれば、私の心も「いわし雲」のように悠々広がっていってくれるでしょうか。

トラックに積めば鉄くず鰯雲　　さるぼぼ@チーム天地夢遥

愛車をダメにしてしまったのか……と読みました。さっきまでは愛車だったのに、「トラックに積めば鉄くず」となってしまうという悲哀。見上げる「鰯雲」はゆっくりと飄々と動いていく。ある日のささやかな感慨を、映像で表現しました。

よくもまあ駄々を鰯雲のやうに　　阿蘇一鷲三ピーマン

いつまでもいつまでも「よくもまあ駄々を」こね続けるものだと呆れているのです。子どもの「駄々」というよりは、

大人のそれかもしれないなと読みました。「鰯雲」を比喩で使っていますが、頭上には連綿と「鰯雲」も広がっているのでしょう。

山頭火もう三日見ず鰯雲　　**樫の木**

放浪の俳人「山頭火」が亡くなった庵は、松山市にあります。一草庵です。温泉のある温かい地でポックリ往生を願った山頭火は、まさに願い通りの最期を、この庵で迎えました。

庵の辺りで「山頭火」を見かけていたのでしばらくは落ち着くのかなと思っていたが、このところ「もう三日」も姿を見ていない。また「鰯雲」のように放浪の旅にでたに違いありません。「もう三日見ず」の呟きが、いかにも「山頭火」らしく。

鰯雲暮しの手帖買ふ日かな　　**清清檸檬**

「暮らしの手帖」を愛読している人は、丁寧に清々しく生活している人のようなイメージがあります。「暮しの手帖買ふ日かな」という穏やかな詠嘆は、美しい「鰯雲」と響き合います。「鰯雲」の美しさ、当たり前の平凡な日々を喜ぶ心が、この句に満ちています。

スプートニク渡る茶毘の夜鰯雲　　**としなり**

「スプートニク」はソ連の人工衛星。空を渡っていく人工衛星の灯を見上げているのは「茶毘の夜」。愛する人を火葬する夜です。見上げる夜の「鰯雲」は美しい。「スプートニク」の灯り、夜の中でも実は青い空。そこに広がる「鰯雲」が美しければ美しいほど、悲しい夜です。

鰯雲電車行っちまって田んぼ　　**藤鷹圓哉**

ははは！こんなことあるよな。と言いつつ、昨日の綾部の句会ライブの帰りがまさにこんな感じでした。駅についたら、一時間に一本の特急が出て行った！（笑）

「電車行っちまって」その後に残っているのは、「田んぼ」。稲が実っている秋の田です。ありありと言葉で切り取られた光景。「電車行っちまって田んぼ」の破調が、がっかり感も巧く表現。味のある一句です。

第201回　２０１８年９月10日週掲載

稗（ひえ）

《秋》イネ科の一年草。米や麦などに比べると味が劣るが、高冷地などで栽培されたり救荒作物として貯蔵されたりもした。米と混炊したり、団子や餅にしたり、調味料などの原料にもされる。

天

穂を出さぬうちに抜かれる稗のばか　　**ことまと**

「稗」を秋の季語として描くのは、思いの外難しいことです。稗というと、鳥の餌か、五穀米十穀米に埋没している粒か、はたまたシリアルの中にあるこれ？と首を傾げるか。昨今ではそんな程度の認識でしょうから、致し方ないといえば致し方ないのでしょう。

「稗」というと稲田に生える雑草として、秋の季語だなと憎まれ口を叩かれることが多いかと思います。が、それにしてもなんとストレートな罵り方！「穂」を出す頃になると厄介だから「穂を出さぬうちに」抜いておこうとするのは模範的農家。みすみす抜かれて悪者呼ばわりされる「稗」を「ばか」と罵倒しつつも、「稗」の運命を肯い慈しむ心も根底にながれていると読みたい一句です。

地

退屈な色して稗穂ほろほろと　　**２４５１６**

「稗穂」は確かに地味です。稲穂のように黄金色ではなく、言われてみると「退屈な色」かもしれません。そして抜かれ、今では雑草として扱われてしまう。「ほろほろと」は「稗」の穂が落ちていく擬態語でありつつ、我が身を儚む感情かもしれません。

馬糞も泥も父祖の匂いや稗を取る　　**くりでん**

「稗」はかつて、人々を飢えから救った貴重な穀物でもありました。「馬糞」も肥やし、「泥」も耕地、全ては「父祖の辛苦の「匂い」なのだよと語る一句。切れ字「や」からの「稗を取る」という淡々たる措辞が、ある時代の手触りと「匂い」を読み手の脳にありありと再生させます。

稗倉に乾ぶ鼠の臼歯かな　　**トポル**

かつて「稗倉」に稗もなくなってしまうほどの飢饉もありました。空っぽになった「稗倉」に入り、しげしげと見渡してみると、そこに落ちているのは「鼠の臼歯」ではないか、というのです。ホントに「鼠の臼歯」だったのかもしれないし、そのように見えたということかもしれませんが、「乾ぶ」の一語が飢饉の時代を見事に語っています。発想のオリジナリティに脱帽。

この欠片土器の底らし稗五合（ごんご）　　**大塚迷路**

「稗」は縄文時代から食されていたようで、縄文や土偶という言葉との取り合わせの句も沢山投句されていましたが、この句は「欠片土器の底らし」とすることで、縄文土器の破片にちがいないと思わせるところが巧い。さらに「らし」と推量で語ることで、かえってリアリティを感じさせます。下五の「稗五合（ごんご）」という鄙びた響きもよいですね。

ばりばりと神のあごひげ稗熟るる　　かもん丸茶

神代から食されていたのかもしれないのが「稗」です。「稗」の熟れた手触りが「ばりばり」しているという句はありましたが、それを「神のあごひげ」だと比喩した点に強いオリジナリティがあります。「稗熟るる」感触を、読者の手に届ける巧い喩えですし、神の時代を想像させる力もあります。

稗の穂や火屋をみがくは子の仕事　　こはまじゆんこ

ランプ等の火を覆うガラス部分の筒を「火屋」と呼びます。まだ電気の普及していない時代には、煤で汚れてしまう「火屋をみがく」のは「子の仕事」でありました。「稗」を食べるしかなかった貧しい時代は「火屋」の灯の揺れる暗い時代でもありました。

稗よりもひくく水よりしづかな妻　　一阿蘇鷲二

「稗」という季語が「妻」と比較されることで比喩され、表現される。こんな発想もあるのか！と驚きました。しかも、一見「妻」のありようを書いているように見せて、実は「稗」という植物の本質を描いている。「稗」も、この「妻」のように「ひくく」「しづか」な生き物なのです。いやはや、この作者には毎回やられます。

稗食えば女が欲しくなると翁　　津軽ちゃう

「稗」のような貧しい穀物を食べると、種の保存本能が刺激されるというのでしょうか。なんでか分からないけど「稗」を食べたら「女が欲しくなる」と言い放つ爺さん。嗚呼、こんなスケベな爺さんいるよな～と思う反面、「爺」ではなく「翁」の一語が一句をただの卑属に落とさない。巧い選択です。

ねやごとを讃ふる唄や稗を搗く　　土井デボン探花

電気のない時代は、夜になれば寝るしかないのです。灯をともす、ということ事態が贅沢な時代。稗搗き唄には、卑猥な歌詞も入っています。その意味も分からないまま「ねやごとを讃ふる唄」を歌いつつ、「稗」を搗いている子どもを思い浮かべました。

稗を刈る姨捨山に子捨穴　　ちゃうりん

「稗」を食べねばならなかった時代には、口減らしの意味も含めて老人たちを「姨捨山」に捨てていたという伝承があります。そんな「姨捨山」に「子捨穴」もあったというのは、事実でしょうか。伝承でしょうか。生きるための切なさとともに「稗」という食物は在り続けてきたのだと思うことしきりです。

稗伸びるいま古事記とか読んでいる　　大蚊里伊織

神代の時代からあったともいわれる「稗」。それが今、すくすくと「伸び」ているのです。兼題に出された「稗」という秋の季語。この季語の本意を知ろうとして「いま古事記とか読んでいる」のでしょうか。「稗」という穀物になじみがないと困った人たちもいたようですが、知ろう学ぼうとするところに、こんな句材見つけられるのだ、ということを実証してくれた句かもしれませんね。

第202回　2018年9月24日週掲載

無月（むげつ）

《秋》陰暦8月15日の夜、雲に覆われて名月が見えないことをいう。月明りで空はどことなく明るく、名月の出ていることを感じさせるが、見ることが出来ない月の姿を思い描く情趣。

天

ねこねずみからす無月の歌舞伎町　　根子屋彦六

いきなり「ねこねずみからす」と生き物の名で始まる一句。平仮名表記は、一音一音確かめるように意味を構築するので、理解する速度が緩みます。脳裏にぼんやりと猫と鼠と鴉の姿が現れたとたん、季語「無月」と「歌舞伎町」の光景が広がります。東洋一の歓楽街「歌舞伎町」は、居酒屋、キャバクラ、ホストクラブ、ラブホテル、パチンコ店、性風俗店等が犇めき、キャッチ、客引き、ポン引きが蠢く街。眠らない街が少し静かになる頃は「ねこねずみからす」の街となります。「無月」の夜が朝へ向かって動き出そうとする頃、嗚呼、中秋の「無月」であったかと見上げるのは疲れて帰るホストか、跋扈する酔いどれ俳人か。「無月」の空はまだ昏く深いのです。

地

無月かな空ほんのりとうづたかき　　神山刻

こんな観察もあるのかと、ハッとします。「無月かな」という上五の詠嘆を「空ほんのりとうづたかき」と描写。雲に隠れた月のありかが「ほんのりと」堆くあるかのようだという感知に、共感を抱きます。「無月」を一物仕立てで描くという志にも拍手。

セルロイド透かしたやうな無月かな　　樫の木

こちらは比喩。「セルロイド」を「透かしたやうな」というのですから、薄ぼんやりと月の所在は分かるという「無月」ですね。どこまでを無月と呼ぶかという議論はあるかもしれませんが、「月の雲」という季語の情趣を、別の角度から切り取ったかのような作品です。

無月かな電柱が見下ろしてくる　　街麦

嗚呼、名月が出てないなと見上げる空。その眼球に映るのは「電柱」です。見えない月と立っているだけの電柱。それに見下ろされている作者。「電柱が見下ろしてくる」という措辞を、孤独感と読むか、飄々たる味わいだと読むか。読み手の心によって様々な心情が動き始めます。

ちりとりの身の上を聞く無月かな　　土井デボン探花

好きだなあ、こういう句も。そこにあるのは、ちと古びた「ちりとり」のみ。中秋の名月を愛でようと外に出てみると、月は出てない「無月」の夜です。庭の片隅に置かれた「ちりとり」の「身の上」話でも聞いてやろうかという洒落心が、粋ではございませんか。多分、虚子もこんな句を面白がるのではないかと思う次第です。

母はまた無月の街の猫となる　　クラウド坂の上

「母」が「無月の街の猫」になるとは、どういう意味か。おそらく認知症による徘徊だろうと思われます。「無月」の夜、あー母がいない！と気づく。「無月の街」の「猫」だという比喩は、罵るようでもあり慈しむようでもあり、悲しくもあり切なくもあり。

Kは死んだ無月の空を一掻きし　　蟻馬次朗

「K」という人物がどのようにどんな理由で「死んだ」のかは一切書かれおりません。ただ、「無月の空」を「一掻き」したかのように死んでいったというのです。ぼんやりとした暗い水中を思ったのは、「一掻き」という言葉からの連想でしょうか。見えない月を掻くような悲鳴も聞こえたような気がしました。

銀貨じやらじやら無月を馭者の低き唄　　一阿蘇鷲二

「銀貨じやらじやら」は馬車に乗る客たちから受け取った報酬のコインでしょうか。「馭者」は「無月」の空を見上げて、馬の尻に一鞭を当てます。馬たちがゆっくりと走り出す蹄の音に交じって、「馭者」の「低き唄」は静かに不気味に聞こえてくるのです。宮沢賢治の童話の世界のようでもあります。

胃がきゅうと鳴って無月をひた走る　　鯉太郎

「胃がきゅうと鳴って」は、腹が減っているのでしょうか、心理的なものでしょうか。己の「胃」の在り方を感じつつ、「無月」を「ひた走る」のです。汽車やバスかもしれませんし、生身で風を受けて走っているのかもしれません。「無月を」の「を」は、経過していく時間や場所を表す助詞ですが、適格に使いこなしています。

大きいトラック養豚場を出て無月　　綱長井ハツオ

「大きいトラック」がゆっくりと「養豚場」から出てきます。中秋の名月の夜ですが、月は出ていません。「無月」です。トラックの中には、出荷される豚が入れられているのでしょうか。豚コレラに感染した死骸だと読む人もいるかもしれません。「無月」の名詞止めが、深い余韻を作ります。

海は無月でアフリカの旗は派手　　司啓

「海は無月」であることと、「アフリカの旗は派手」であることは何の関係もありません。真っ暗な「海」と暗い「無月」の空。中秋の名月が出てないことを愛でる日本人の美意識と、強烈にして「派手」な色彩をよしとする「アフリカ」の国々の「旗」。二つの美意識の対比が、ぶつかって言葉の火花を散らせます。それが、取り合わせの妙というヤツです。

第203回　2018年10月8日週掲載

無花果（いちじく）

《秋》クワ科の落葉小高木。花が咲かず実がなるというのでこの字が当てられたが、実に見えるのは花嚢（かのう）で、実際の花や実はこの内側にある。

天

いちじくに刺さる西太后の爪　　花屋

「いちじく」は数ある中ではかなり異色なイメージをもつ果実。アダムとイブの逸話は無花果の葉ですが、果実をもぐと滲み出る樹液は母乳にも精液にも喩えられます。不老長寿の果物と呼ばれた時代もあり、独特の形に妖しく怖ろしい印象を持つ人もいます。

そんな「いちじく」と「西太后」を取り合わせた一句。「西太后」にまつわる虚々実々の伝聞は禍々しいものばかり。この「爪」は特権階級であることを示す長く長く伸ばした爪。主に小指と薬指を伸ばしていたと聞きますが、長く尖った「爪」が、皮膚のような質感の「いちじく」に深々と刺さっていく怖ろしさ。最後の「爪」の一語によって「いちじく」は、絢爛に凄惨に匂い立ちます。

昨日の人選に、やはり西太后と取り合わせた句がありました。「無花果や西太后の金の護指　中岡秀次」　護指とは、伸ばした爪を守る装身具です。句材は似ていますが、モノとして取り合わせてあるのが中岡句であり、「刺さる」という行為によって「いちじく」を生々しく描写しようとしているのが、花屋句。季語の本意という意味において、後者に軍配をあげた次第です。

地

いちじくやさかむけ剥くやうでこはい　ヒカリゴケ

「いちじく」の皮は薄くて剥きにくい。というか、剥こうとすると切れてしまうことが多いです。この指の感触は何かに似ている。「さかむけ剥くやうでこはい」というフレーズは、無花果という果物の持つ皮膚感を生々しく呟いています。歴史的仮名遣いの表記も、おどおどしてて、巧い選択です。

無花果の噛みつきさうな尻の穴　笑松

「無花果」を愉快に描いたのがこちら。お尻に注目するあたりが、俳人的視点であり、あの形状を「噛みつきさうな尻の穴」と比喩できるのが俳人的センスであります。最後に「穴」のアップで終わる語順も巧いもんだなあ。

無花果の顔つきモジリアニに似て　しかもり

今度は「顔」に注目です。「無花果」のカタチが、そのまま画家「モジリアニ」が描く人物の顔に似てるなと思う。カタチつまり輪郭だけではなく「顔つき」と感じ取っているところが面白い把握です。切れのない型が、句のあとの余白に想像を広げさせます。

無花果やてんぐのはなのあじする　ちま（4さい）

「てんぐのはな」を舐めたことはないけど、「無花果」のカタチをみてたら「てんぐのはな」みたいだな！と気づいたのでしょうね。カタチが「てんぐのはな」に似てるのなら、「あじ」も似てるに違いない。その発想が楽しい作品です。

ぽつてりと無花果ふつくらと太陽　めいおう星

「ぽつてり」と表現された「無花果」は、「太陽」の恵みを受けて太っていきます。「無花果」を太らせる「太陽」はまた「ふっくらと」豊かに秋を育てていきます。「ぽつてり」「ふつくら」という擬態語は、滋味豊かな「無花果」をそのまま描いてて見事。これもまた「無花果」の本意の一つを描いている作品です。

コーランの無花果聖書の無花果　マオ

「聖書」に書かれたアダムとイブにまつわる「無花果」の葉の逸話は知っていますが、「コーラン」にも「無花果」が出てくることを今回初めて知りました。ネット事典には「夢に現れるイチジクには、専制的でない男という意味がある。また、夢でイチジクを入手することは富を意味し、イチジクを食べると、神により子供を恵まれることを意味する」という記述があります。「無花果」が古代から人類とともにあるのだということを、こんな対句表現で表現してしまうのも、短詩型文学の強みだなあと感服しました。

いちじくや第二婦人は子だくさん　まどん

「第二婦人」ということは、当然第一婦人もいるということ。「子だくさん」の賑やかな「第二婦人」の周辺に対して、第一婦人の静かな居室も想像できます。ひょっとしたら子どもに恵まれていない第一婦人かも？とも思いました。季語「いちじく」がコーランにも描かれていると知りましたので、イスラムの国の一夫多妻制の家の、案外平和で和やかな生活の一部を見せてもらったような気持ちになりました。

無花果や秘部これほどに美しき　ラーラ

ここまでストレートに書くか！という驚きの一句。勿論、「秘部」には①秘密の部分。②からだの秘すべき部分。陰部。と二つの意味があります。が、この書き方ですから、「無花果」の「秘部」は、そのまま人間の体の秘部を思わせます。しかもそれを「これほどに美しき」と言い放てるのが、この作家の大胆さです。

無花果や月はでつぷり腫れあがる　一阿蘇鷲二

「無花果や」と強調して、果実をアップしておいて、「月」の光景へとカットを切り替えます。「無花果」も「月」も「でつぷり腫れあがる」秋の夜。美しさと醜さを同時に持つものとして、描かれている「無花果」と「月」です。

第204回　2018年10月22日週掲載

色鳥（いろどり）

《秋》秋になると渡ってくる鳥のうちでも、特に体や羽の色の美しい小鳥の総称。

天

色鳥来しずかなしずかな家族葬　あいだほ

秋に渡って来るさまざまな小鳥の中でも、特に羽の色の美しい鳥たちが「色鳥」。今年も時と場所を違えず「色鳥」が渡ってきました。上五「色鳥来」と終止形で切れた後、中七は「しずかなしずかな」というリフレイン。一体何が静かなのかと疑問に思った瞬間にでてくるのが下五「家族葬」の一語です。家族だけで見送る葬儀。棺の周りに集まっている家族たち。しずかな涙。亡骸の微笑むような表情までもが見えてくるようです。今年の「色鳥」の到来を待たずして亡くなったのは、大往生の父でしょうか、母でしょうか。はたまた逆縁の子でしょうか。そんな家族の悲しみを慰めるように、祈るように「色鳥」たちは美しい光と影を弾きながら集まってきます。

地

色鳥の尾つぽきらきら鳴りさうな　とかき星

「色鳥」の特徴はまさに羽の美しい色ですが、「尾つぽ」に焦点を当てた一物仕立ての一句。楽しげに動く「尾つぽ」が今にも「きらきら鳴りさうな」という描写は、「色鳥」そのものの動きまで見せてくれるかのよう。「鳴りさうな」と切れを作らない叙述は、何羽も現れては消える様子を想像させます。

色鳥やポリエステルのやうな聲　城内幸江

「色鳥」たちの鳴き声を比喩する発想もあってよいですね。「ポリエステル」は、丈夫で皺になりにくく染色性にも優れている化学繊維。「色鳥」は一羽の特定した鳥を指すのではなく、さまざまな鳥であるというのがこの季語の本意ですから、それらの共通項として「ポリエステルのやうな聲」と特色を詩的に指摘しているのです。まさにきらきらと発色の良い囀りでありますね。

色鳥や嘘つきそうな色だこと　神山刻

これも「色鳥」ですから「色」に注目する発想は当然でてきますが、その「色」を「嘘つきそうな色」だと比喩している点にオリジナリティがあります。「色鳥」を明るく可愛く楽しげに描くのではなく、「嘘つきさう」と皮肉な視線を投げかける。そういわれると、「色鳥」の美しさに猜疑心が生まれてくる。それもまた「色鳥」という季語の持つ反面的な本意だといえるでしょう。

色鳥やリカーの瓶のはがねいろ　ローストビーフ

「色鳥」と別の色を取り合わせる発想もあります。「リカー」は酒類ですね。「リカーの瓶」は人工物としての「はがねいろ」であり、「色鳥」は自然物としての色。その対比が率直に表現されています。「はがねいろ」を平仮名書きすることで「リカーの瓶」が主張しすぎないように配慮している点など、言語のバランス感覚を褒めたい作品です。

色鳥のなか色鳥といへぬ鳥　可笑式

たしかにね！という納得の一句。しかし「色鳥といへぬ鳥」自身は「色鳥」のつもりでいるのかもしれないな、なんて思ったりもします。「色鳥」は一羽であって一羽でない、という特徴も持つ季語。複数の印象をうまく使っている点にも工夫があります。

色鳥へ朱を与へし猿の神　蟻馬次朗

「色鳥」の色に注目しつつ、取り合わせの要素を入れてくる作品もありました。「色鳥」の「朱」は「猿の神」が与えたものであるよ、という発想が実に面白い。「猿の神」の正体が何者かは分かりませんが、猿の顔の赤、尻の赤の印象が句中の「朱」にリアリティを添えます。これも天に推したかった作品です。

とんぷくや色鳥の色はじきあふ　とおと

天に推したかったという意味では、この作品も好きです。「とんぷく」とは「頓服薬」のことでしょう。上五「とんぷくや」と強調していますから、「とんぷく」を飲んだ直後という印象です。この薬は、食前食後のように決まった時間に飲むものではなく、発作が起こったり症状の強く出ている時に飲むもの。「とんぷく」を飲み終わり、大丈夫これからおさまってくるに違いないという安堵を抱きつつ、ふとみると「色鳥」たちが互いの「色」を「はじきあふ」ように枝枝を跳ねている。飛び交っている。そんなささやかな時間を切り取った作品です。同時投句「手遊びの指のあかるく色鳥来」も優しい味わい。

色鳥のくはへてをるはだれのスペル　一阿蘇鷲二

「色鳥」が「くはへて」いるものは何だろうという発想から生まれた一句です。「だれ」かの「スペル」を咥えているという展開に惹かれます。秋に渡ってくる鳥たちは、外つ国で可愛がってくれた誰かの名の「スペル」を覚えているに違いない、と読んでみるのも楽しいですね。「くはへてをるは」という措辞は、「色鳥」の嘴にじっと焦点を合わせていくような効果があります。

電気きた水がきた色鳥がきた　香野さとみ

開発途上国というよりは、山の中で自給自足の暮らしを始めているのかもと読みたくなりました。「電気きた」は、太陽光の蓄電ができるようになったのかもしれません。「水がきた」は、山の水を小屋の近くまで引く作業が完了したのかもしれません。そんな生きるための要素が整ってきた頃、「色鳥がきた」のです。色鳥の集う秋の次には、冬がやってきます。冬籠のための準備も始まります。

シベリアのぬりえは月とあの色鳥　司啓

「シベリアのぬりえ」「月」「色鳥」三つの取り合わせは、まるで絵本のような世界。少しずつ塗りながら、絵本が完成していく様子が想像されます。この句の「シベリア」「月」は銀色のイメージがしますが、そこに線描された「色鳥」をどんな色で塗るのか。その思いに詩があります。

第205回　2018年11月5日週掲載

胡桃（くるみ）

《秋》クルミ科の落葉高木。核が非常に硬く、これを割る道具もあるが、種子を取り出して食用にする。脂肪が多く美味で、洋菓子やパンに入れられる。

天

リスの割る胡桃のなんときれいなこと　中岡秀次

「胡桃」と「リス」とはなんとベタな発想か。「胡桃」という兼題を与えられて、真っ先に除外するのが「リス」との取り合わせだろうとすら思います。が、その一方で、奇麗に真っ二つに割れている胡桃の殻と初めて遭遇した時の疑問と、それが栗鼠たちのものであることを知った時の驚きとが率直に書かれた、コロンブスの卵的な作品でもあります。「リス」は小さな両手で「胡桃」を抱くように持ち、割れ目に歯を当てクルクル回しながら殻を割っていきます。人間たちは無様な道具を使って殻を叩き潰すことしか出来ないが、「リス」たちはこんなにも「きれい」に割るのだという感嘆。「なんときれいなこと」という素直な呟きが詩句として結球しています。

地

胡桃割るべくとつかかり探す嘴　一阿蘇鷲二

賢い鴉たちならば、硬い「胡桃」を割ろうと「嘴（はし）」で取っかかりを探したりはしないでしょう。上空から「胡桃」を落としたり、信号で止まった車のタイヤの前に「胡桃」を置いて割る等、鴉たちの賢さのエピソードを読んだことがあります。

この「嘴」の持ち主は、もう少し間抜けな鳥たちだろうと思いましたが、鴉たちも最初は、「胡桃」を割ろうとして「とつかかり（取っ掛かり）」を探した末に、合理的な割り方を編み出したわけですから、「胡桃」と鳥たちの格闘の歴史も含んでいる句かもしれないですねえ（笑）。

人形の吐物となして割る胡桃　星埜黴円

「人形」とは、胡桃割り人形。頭でっかちで大きな顎をもった「人形」の口に「胡桃」を押し込み、ガチリと割ります。見事に割れた「胡桃」はまるで「人形の吐物」ではないか、という指摘に納得せざるを得ません。無様にして強引な割り方へのささやかな抵抗感。リスたちの「なんときれいな」割り方の対極にあるのが、「人形の吐物」という感じ方です。

耳に当てて胡桃これまた耳のやう　井上じろ

「胡桃」の殻を振ると、中でかすかな音を立てているのがあったのでしょうか。「耳に当てて」みると「胡桃」そのものが「耳のやう」だなという静かな呟き。「胡桃」の襞を脳に喩える句は沢山ありましたが、いわれてみると「耳」独特の襞のような形状もまた「胡桃」に似ています。その小さな発見が小さな詩。「耳に当てて～耳のやう」というリフレインが優しい調べを作ります。

胡桃選る指輪入れるによき胡桃　倉木はじめ

「胡桃」のカタチは、一種芸術品のような趣もあります。どの「胡桃」がいいかなと眺めつつ、これは「指輪入れるによき胡桃」だななんて思いながら選っているのです。本当に入れるというのではなく、大切な「指輪」を仕舞いたくなるような「胡桃」という、一つの讃辞として読めばいいでしょう。「胡桃選る～よき胡桃」という言葉の並びも楽しめる作品です。

避難所に胡桃の匂ふ灯りかな　ぎんやんま

「避難所」の広い畳の部屋でしょうか。「胡桃」が匂うのですから、体育館のような広さではない「避難所」を思いました。「胡桃の匂ふ」は、軽く煎ったものかもしれません。あら、胡桃ですね、なんていいながら、同じ境遇の者として「胡桃」を分け合い、語り合う。「避難所」の生活の一コマが「灯りかな」の詠嘆となって、読者の心に届きます。

マクベスの原文こつん胡桃割る　Mコスモ

「胡桃」というと、書斎・ウイスキーといったイメージを持つ人もいるはずです。愛用の胡桃割りで「こつん」と割りながら「マクベスの原文」を読む。そんな知的な人物が浮かんできます。その傍らには、イギリスのウイスキーも香っているに違いありません。

胡桃二〇キロ抱えて同志ポチョムキン　ウェンズデー正人

戦艦ポチョムキンの反乱を思わせる名前ではありますが、あの事件を前提に読む必要もないでしょう。「胡桃二十キロ抱えて」までは労働かと思いますが、「同志」という言葉が出てくると、一気に革命に読みが傾いていく。さらに「ポチョムキン」とあれば、ある時代のロシアが浮かび上がってきます。食料を探してきたのか、差し入れがあったのか、はたまた略奪したのか。読みはいかようにも膨れていきます。

あの頃は家族でしたね胡桃割る　おんちゃん。

「あの頃は家族でしたね」と呟きながら、一緒に「胡桃」を割っていると読みましたが、「あの頃」を思い出しながら一人で割っていると読む人もいるでしょう。「家族」という名の絆の脆さと、硬い「胡桃」の殻。割ってみると、もう二度と元には戻らない。それが「家族」と「胡桃」の共通点なのですね、という静かな諦めの呟き。

わたくしが月にならうと胡桃言ふ　薄荷光

「月」がないことを嘆きなさんな。「わたくし」があなたの「月」になってあげましょうと「胡桃」が語りかけてくれる、というのです。夜の闇を歩くための明かりとして貴方を照らしてあげるよ、という慈しみの言葉だと読んでいくと、その台詞が「胡桃」のものだと分かる。そのとたん、読者は虚の世界に迷い込んでしまったかのような困惑を覚えます。「胡桃」もまた、何かの比喩的意味を持つのだなと、

読みの迷路を歩き始める。それもまた、俳句を鑑賞する側の楽しみです。わが手にある硬い「胡桃」の感触と語り合っているような気持ちになります。

火球飛ぶ夜を掌中に鳴る胡桃　　めいおう星

「火球」とは三等星～四等星よりも明るい流星のことだそうです。あれは何?!というほどの明るさで飛んでいく星。そんな夜の我が「掌中」にあるのは硬い「胡桃」です。音を立てずに夜空を飛び、やがて消滅していく「火球」と、手の中でカチカチと鳴る硬い「胡桃」。二つの対比が、詩的空間を広げます。

第206回　2018年11月19日週掲載

炬燵（こたつ）

《冬》古くは囲炉裏を切った上に櫓をのせ布団を掛けたり、また櫓の中に火鉢などを置いたりして暖をとった。現代では電気炬燵が一般的となり、布団の上に板をのせ、食卓などとして利用する。

天

遊郭の如き炬燵の灯りかな　　あー無精

電気炬燵が売り出された当初、中の熱源は無色だったそうです。赤外線自身は赤くはないのに、なぜ「炬燵」の赤外線ランプは赤いのか。それは、スイッチを入れているか否かが一目で分かるように、というメーカー側の工夫だったということを初めて知りました。

一家団欒のイメージが強い「炬燵」ですが、その本意は、怠惰・孤独・卑猥など複雑な要素を持つ季語であることを改めて思い知らされました。赤外線ランプの独特の赤を「遊郭の如き」と比喩したこの一句は、赤線という言葉が生き残っていた時代を思わせます。「炬燵」の中で絡み合う足、熱っぽくぐもった嬌声、白粉の匂い等を残像として、赤外線ランプの「灯り」を眺める作者がいます。

地

聞分けの悪い炬燵を飼うてゐる　　すりいぴい

「聞分け」が「悪い」のは「炬燵」ではなく、我々人間のほうなんだけど、こうでも言わないと「炬燵」から抜け出せないのだね。「飼うてゐる」という擬人化が鼻につかないのは、「聞分けの悪い炬燵」という存在への、怠惰な共感のせいか。

こうなれば炬燵と心中していいか　　大塚迷路

ここまで抜け出せないのならば、もう「炬燵」と「心中」してもいいという呟きが可笑しいよ。「こうなれば」が、どの程度の「こう」なのか。想像すればするほど、孤独にも卑猥に諦めにも読めて、ますます可笑しいのだよ、迷路さん。

墓炬燵凡そ同じなりかたち　　きゅうもん@木ノ芽

「墓」と「炬燵」がおんなじ「なりかたち」であるという発見というか定義というか、その飄々たる呟きがこれまた可笑しい。「炬燵」に籠もりつつ、「墓」の中に入った時の気分ってのは、こんな感じなのかなあと考えているに違いない作者の「なりかたち」も可笑しいのだよ、きゅうもんさん。

炬燵を少し離れて四方に家具の立つ　　一阿蘇鷲二

馬鹿馬鹿しいと思う読者もいるかもしれません。「炬燵」を「少し離れて」いる辺りの「四方」に「家具」がそそり立っているのです。小さな部屋の真ん中にちんまりと置かれた「炬燵」、部屋の「四方」をかためるように置かれた家具。「炬燵」に足を突っ込んで、「家具」を見上げているに違いない作者までが、否応なく見えてくる。これも立派な俳句です。

運ばれる炬燵の骨の淋しさう　　かのたま

「運ばれ」てくる「炬燵の骨」は剥きだしです。部屋の真ん中に置かれ、炬燵布団がかけられ、赤外線ランプが赤く点くまでは、「炬燵の骨」は所在なく淋しい存在なのです。「運ばれる」という動作。それを眺めている作者の「淋しさう」という呟き。淡々とした語り口に味があります。

七並べのキング炬燵の端を落つ　　かをり

「炬燵」とトランプの取り合わせはいかにもありそうな類想ですが、後半の描写が見事です。「炬燵」の天板いっぱいに並べている「七並べ」。その端っこに置かれた「キング」の札が、「炬燵の端」から落ちた瞬間を切り取った一句。「炬燵の端を落つ」という描写の精度が天晴れです。

金貸は奥の炬燵に居るらしき　　キッカワテツヤ

こんな「金貸」を見たことがあるような気がしてきます。それが、この句の底力なんだなあと思うのです。金を借りにいったけど、主人である「金貸」は出てこないで、番頭か奥さんかにあしらわれているのでしょうか。「奥の炬燵に居るらしき」という気配が、いかにも憎々しい。映画の一場面のような一句です。

炬燵の微睡み日本負けていた　　或人

「日本」を応援するためにずっとテレビを観てたのに、「炬燵」があまりにも気持ちいいもんだから、ついついの「微睡み」。ハッと気がつくと「日本負けていた」！　負けた悔しさと見逃してしまった悔しさ。二重の悔しさが、可笑しい一句。

こたつのなかにおかあさんのばかとかく　　碧女

「こたつ」の中にもぐっているのは、「おかあさん」に叱られたからでしょうか。面と向かって言えないものだから、「こ

たつ」の中で「おかあさんのばか」と書いている子。お絵描き帳か、折り紙か、そんなものにクレヨンで書いてるに違いない子が見えてきて、抱きしめたいほど可愛いよ。

猫でなく炬燵に何かいるような　風来松

「炬燵」と「猫」も、いかにもありそうなテッパンの類想ですが、「猫でなく」となれば一気に面白くなってきます。いつもどおり「炬燵」の中の足先に触れているのは「猫」だと思ってたけど、「猫」はいま悠々と炬燵を出ていった?!　じゃあ、この「炬燵」の中にいる「何か」は何？　下五「いるような」という切れのない終わり方が、いかにも怪しくて可笑しい。

猫と蜜柑足して炬燵で割ればよし　ぐ

「炬燵」と「猫」はテッパンの類想。「蜜柑」と「炬燵」もテッパンの類想にして季重なり。それを堂々とやってる根性がいい。「～足して～割ればよし」という展開に大拍手！　俳句でやっていけないことは何もない！　この作家にとって、類想も季重なりも怖いものはないのだなと思うと、ますます愉快でしょうがないよ（爆笑）。

第207回　2018年12月3日週掲載

重ね着（かさぎ）

《冬》冬の寒い時、何枚も衣服を重ねて着ること。厚着。重ね着した衣服を脱いだ時の身軽さは爽快である。

天

重ね着て父恍惚の幹となる　次郎の飼い主

「重ね着」の「父」という発想の句はいくらでもありますが、後半の「恍惚の幹となる」という措辞に胸を衝かれました。「父」とはまさに「幹」のような存在ですが、今「恍惚」の人となっている。

この「恍惚」という言葉には幾つかの意味があります。何かに心を寄せうっとりする恍惚。美しい冬夕焼けに見惚れているのかもしれません。意識がはっきりしていない恍惚。人生に疲れ切っているのかもしれません。老人特有の病的恍惚。もはや作者である娘を認識できない父となっているのかもしれません。どの意味に読んでも、この句はそれぞれの味わいとなります。年輪のように「重ね着て」静かに佇む「父」。その「幹」のような姿に静かな感動を覚えます。

同時投句「重ね着て牝馬に打ちし◎」も、最後の二重丸の読ませ方が面白い。

地

重ね着の最後の袖が通らない　樫の木

まさに「重ね着」らしい一句。季語「着ぶくれ」との違いは、「最後の袖が通らない」のような途中経過が入ってくるのが「重ね着」の特徴の一つ。「最後の袖が通らない」という実感を読み手はリアルに共有します。

同時投句「重ね着の襟擦り切れて哲学科」は、袖ではなく「襟」であるところに「哲学科」っぽい（勝手なイメージだけど）世捨て人的無雑作が見えます。

重ね着の最後の色がそれではな　司啓

「重ね着の最後の」まではさっきの句と全く同じなのに、そこからの展開が笑えます。ここまで奇麗な色のものも重ねて着てきたのに、なんでよりによって「最後の色」をそれにするのか。「それではな」という台詞が、他人として突き放した感があってリアル。

重ね着ちくちく読経いよいよ佳境らし　一阿蘇鷲二

本堂は寒いからと親族一同喪服の下に「重ね着」しての法事を想像しました。いつもは着ないモノを念のためと着込んでみたら、首のあたりが「ちくちく」する。「ちくちく」と足の痺れに苛まれてきたが、和尚の「読経」も「いよいよ佳境」に入ってきたような気がする。小さな安堵が広がり始めている「重ね着」です。

同時投句は、以下それぞれの味わい。やはりこの作家は巧い。「重ね着の腹に病ひの猫眠る」「重ね着て産後の馬の様子見に」「重ね着の最後の穴を抜けにけり」

重ね着に探る陽物見つからず見つからず　凡鑽

前半「重ね着に探る」は、切符とか鍵とかを「重ね着」のどのポケットに入れたのか分からなくなって探している状況なのだろうと、読者の脳は勝手に想像します。ところが後半の「陽物見つからず」が傑作。ズボンのチャックのその奥を探しておりますという自虐に苦笑しきり。

同時投句「検診に開く重ね着曼陀羅華」中七の「開く」は「はだく」とも読みます。作者としてはそう読んで欲しいとのこと。この句も後半「重ね着曼陀羅華」が、恍惚感があって好き。

重ね着や波は自傷を繰り返し　あいだほ

「重ね着」と光景を取り合わせるのは案外難しいのですが、波打ち際の光景を巧く描いています。「波」が寄せては砕けていく様子を「自傷を繰り返し」と比喩。冬の冷たい光が砕け散るさまが痛々しく表現されています。この比喩から、「重ね着」の中に隠している手首にも自傷の傷があるのかも、と深読みを始める読者もでてくるのちがいありません。

同時投句「厚着して10対0の事故現場」「山荘のプードル誰よりも厚着」共に場面をありありとスケッチしています。

アイドルのショー重ね着のガードマン　アダー女

「アイドルのショー」に押し寄せる観客。アイドルの名前を書いたプラカードや団扇。お揃いのファッションでやってくる女の子たち。髪をつんつん立てた男の子たち。大きなお

友達と呼ばれるオトナ。その喧噪の中、無表情に立っている「ガードマン」の「重ね着」に気づくのが俳人のまなざしですね。「重ね着」のみが漢字。そこだけ着ふくれている気分です。

同時投句「重ね着や番記者の待つ永田町」は、「番記者」「永田町」がややお決まりっぽい展開だけど、ここにも「重ね着」があるよなという納得。

重ね着の霊安室の遺族かな　　星埜黴円

「霊安室」は寒いですからと促され、コートを着込んで入っていくのでしょう。淡々たる語り口ですが、外気の寒さとは違う冷気、匂い、悲しみがひたひたと押し寄せてくる一句。最後の「遺族かな」という詠嘆が、映像と思いを伝えます。

同時投句「重ね着やカードのサインやや歪む」「重ね着のまま万歳を叫びたり」、小さな場面を切り取って、様々に想像させるテクニックの二句。

重ね着や倉庫三つを失つて　　Y雨日

「倉庫三つを失つて」は火事かと読みました。勿論、倒産とか詐欺にあったとか、読み方は色々あってよいのですが、冬の季語「重ね着」が、冬の季語「火事」を思わせたのかもしれません。「重ね着」をした人物が、倉庫三つ分の焼け跡に立っている。そんな光景と共に、「失つて」のその先をも想像させる一句です。

重ね着空きっ腹詩はいつだつて黎明期　　めいおう星

「重ね着空きっ腹」を長い上五として置き、中七下五で「詩はいつだつて黎明期」とリズムを取り戻します。貧乏で腹を空かせていて、でも「詩」を書きたい表現し続けたい。そんな滾る思いを腹に溜めている。「詩はいつだつて黎明期」という言葉に元気づけられます。ワタシたちの、俳句という17音詩も「いつだつて黎明期」だぞ！という気概をもって続けていきたいものです。

同時投句は愉快。「重ね着の仕上げに呼べば猫来る」

重ね着やちゃんと前向いて歩け　　ちびつぶぶどう

「ちゃんと前向いて歩け」は世相への批判と読んでもよいですし、自分自身へのエールだと読むこともできます。今のワタシは、後者として読みたい（状況および心情）です。かっこ悪くムクムク「重ね着」してドタバタ必死で生きてるけど、下向いちゃいけない。ましてや後ろを向いてはお仕舞いだ。「ちゃんと前向いて歩け」よ、ワタシ。

以下、ちびつぶぶどう、中年の主張も♪

●ちゃんと前向いて歩こうと思った。そしたら、行き交う人達が呆れるくらい前を向かず、歩きスマホはもちろん、下を向いて無防備に歩いている。数えたらほぼ8割の歩行者が、前を向いていない。平和な世の中とはいえ、ちょっとおかしいな。前を向いて歩こう！／ちびつぶぶどう

第208回　2018年12月17日週掲載

枇杷（びわ）の花（はな）

《冬》暖かい地方で果樹として栽培される事が多い枇杷は、バラ科の常緑高木で、冬に黄をおびた白く小さい五弁花が多数集まって咲く。芳香はあるものの、見た目は地味でひっそりとしている。

天

水汲めば仄かに濁り枇杷の花　　樫の木

「水」を汲んでみると、水底の砂を巻き上げて「仄かに」濁った、という状況を描いた句は幾らでもあります。が、この上五中七の詩句に季語「枇杷の花」が取り合わせられたとたん、一句は化学変化を起こします。季語「枇杷の花」は、咲いてるのかどうかも分かりにくい地味な花。誰かが汲むことによって濁るという状態が生じる「水」。それはまるで地味な「枇杷の花」が咲きいづるような仄かな濁りと光なのですよ、「枇杷の花」とは仄かに水を濁らせるように咲く花なのですよ、と一句は語りかけてきます。言葉と言葉が出会うことによって生じる詩という名の火花を楽しむのが、取り合わせという手法。仄かなものであればあるほど、慈しみ深い美しさを持つ。それもまた俳句という文芸の滋味というものです。

地

びわのはなとおれませんとかいてある　　ゆいのすけ3さい

「びわのはな」が咲いている田舎道かな。野の枇杷ならば山道かもしれません。細道をたどっていくと、この先は「とおれません」と書いてある看板があったのでしょう。小さな経験から紡がれた現場証明のある俳句。平仮名をかさねた表記も内容に似合っています。

ほけん室のベッド広くてびわの花　　幸の実（9才）

体調が悪くて訪れた「ほけん室」。しばらく横になりましょうね、と優しい養護の先生が用意して下さった「ベッド」。でもその寝床は妙に「広く」感じて落ち着かないのです。保健室の窓辺から見えるのは「枇杷の花」。花のくせにキレイじゃないよな、と思いながら見上げているのかもしれません。

枇杷の花なら見てゐられさうな予後　　一阿蘇鷲二

「予後」とは、病気や手術の後、どの程度回復するかという見通しを指す言葉です。予後が良いとか悪いとか、というふうに使います。派手で賑やかな花を眺めるだけの力はないが、「枇杷の花」みたいに咲いてるのだか咲いてないのだか分からないような花ならば「見てゐられさうな」という言い方に、「予後」なるリアリティがあります。語順もしみじみ巧い。これも天に推したかった句です。

枇杷の花吐きだしてゐる樋の口　　比々き

枇杷は比較的背の高い木ですから、梢に咲いている花たちが屋根の上にも落ちてきます。落ちた花々が雨に流されて「樋」の中から吐き出されているのです。「吐きだしてゐる」という措辞は、まさに写生の力。下五「樋の口」というクローズアップの映像が見事です。

枇杷の花サンスクリット語で香る　　蟻馬次朗

「サンスクリット語」とは、古代インドの文学語で梵語ともいいます。あの地味な「枇杷の花」の思わぬ香りを詠んだ作品も多々ありましたが、「サンスクリット語で香る」という比喩は面白い。古代インド文学のように香るという把握が、「枇杷の花」の寂しげだけれど、只者ではない感じをうまく表現しています。

駱駝の子目覚めるやうに枇杷の咲く　　三重丸

「枇杷の花」は、よく見ると毛むくじゃらの印象。灰褐色の産毛のようなものに包まれ、辛うじて咲いているという印象の花です。一気に「駱駝の子目覚めるやうに」と畳み掛けてくるのが、この句の魅力。そういわれるとそんな気がしているのが、比喩の強みというヤツです。

枇杷咲けり蟲の卵の孵るかに　　古都ぎんう

同じ比喩でも、クローズアップの映像。「枇杷咲けり」という映像を「蟲の卵」と喩えた眼力が見事。確かにあの花々は、まるで「蟲の卵」のような色と形状をしている。「虫」ではなく「蟲」の表記も怪しげです。枇杷の花ならではの様々な比喩を楽しませてもらってます。

花枇杷を苛むに清潔なペン　　Y雨日

「花枇杷」を「ペン」でスケッチしている光景を思いましたが、文章として書き記そうとしていると読んでもよいでしょう。花というにはあまりにも醜い「花枇杷」を一体どう表現したらよいか。「苛む」という言葉が、こんな美しく表現されていることにうっとり。「清潔なペン」という詩語が、この句の一番の魅力ですね。これも天に推したかった作品。

枇杷の花小鳥1の役に決まったよ　　座敷わらしなつき（7才）

「枇杷の花」の咲く頃の発表会でしょうか。クラスで演じる劇の役どころは「小鳥1の役」。1があれば、2も3もあるのでしょう。口々に「枇杷の花」を苛む役か。はたまた慰める役か。醜いアヒルの子のような「枇杷の花」をめぐる小鳥たちのおしゃべり。どんな劇なのかと想像が広がります。

弟の夢兄の意地枇杷の花　　あみま

神話の世界にも兄弟はよく出てきます。海彦山彦もそうですし、カインとアベルもそうです。神話と読んでも人間と読んでも、「枇杷の花」との取り合わせが、地味にして滋味。「弟」は純粋に「夢」を追い、「兄」は年長者の「意地」として己に鞭打つ。「枇杷の花」は神話の世界から現在まで、さまざまな兄弟の生き様を眺めつつ、静かに咲き続けているのです。

ゴーガンの女は勝手枇杷の花　　大雅

「ゴーガン」は、後期印象派を代表するフランスの画家。大胆な装飾的構図や色彩が特徴の画家「ゴーガン」の描く「女」たちの傍らには、いつも枇杷の実が彩られているような印象があります。

それにしてもこの句、タヒチ島やドミニカ島の色彩のイメージと、日本的な「枇杷の花」のミスマッチが心にひっかかってしかたありません。「ゴーガンの女」が勝手なのではなく、彼自身の生き方がずいぶん「勝手」だったのではないか。そもそも「ゴーガンの女」とは、彼が描いた女たちなのか。彼と出会い翻弄された女たちなのか。そんなことを考えながら、「ゴーガン」の一生を読み耽っていたら、思わぬ時間が過ぎていました。

なぜこの句に惹かれてしまうのか、明確な説明ができないまま、句の世界に溺れてしまう。それもまた作品の力なのでしょう。いつか私にもうちょっと分析する力が身についたら、この句の魅力を客観的に語れる日がくるかもしれない。それまで、ひそやかな愛唱句として心にとめておきます。

第209回　2019年1月14日週掲載

雪兎（ゆきうさぎ）

《冬》雪を固めて兎の形にして、盆の上に載せたもの。目には南天の実、耳には青い笹の葉などを用いる。

天

雪うさぎのなんとあたたかさうな白　　ぐでたまご

なんとも単純にして、なんとも「雪うさぎ」らしさにあふれた一句。「雪うさぎ」と「あたたか」という言葉を取り合わせる発想の句はあるに違いありません（今回の投句にも数句ありました）が、全ての言葉を受け止める「白」の一語が鮮やかです。例えば、「雪うさぎ」と「雪だるま」の違いを確保したい時、大きさや場所の違いを書きたくなりがちですが、「あたたかさうな白」という心情を含んだ質感で表現する。その感覚が瑞々しいのです。小さな「雪うさぎ」は、その小ささゆえに雪の日の太陽を透かせ、表面の雪の粒が光を弾きます。丸いかたち、赤い実の目、小さな葉っぱの耳。季語「雪うさぎ」の存在そのものが「あたたか」なものなのだなと、読み手の心まであたたかくなってくる作品でした。

地

雪うさぎ机上静かな野となりぬ　　にゃん

季語「雪うさぎ」の解説には「盆の上に飾り」という文言がでてくることが多いですね。当然のことながら、この「机上」には「雪うさぎ」を飾った盆が置かれているのです。「雪うさぎ」の明るさ、冷たさが、机の上を「静かな野」にしてしまうという清浄な一句。「静かな野」という詩語に格調が添います。

七つ目の雪うさぎおくすべり台　　幸の実（9才）

「七」という数詞が巧い。「雪うさぎ」を「すべり台」に置くという映像を「七つ」という数詞が支えます。しかも「七つ目」ですから、一つずつ作っては並べている子どもたちも見えてくる。小学生って、俳句のタネを自ら生み出す名人だよな！

同時投句「かいねこのざらりとなめるゆきうさぎ」の、猫の舌の「ざらり」と舐める雪の感触にも惹かれました。

雪うさぎ朝の校歌の豊かなり　　一阿蘇鷲二

「雪だるま」でもよいのでは？と思う人もいるかもしれませんが、「雪だるま」だと校庭の外で「朝の校歌」を聞いている感じ。「雪うさぎ」となれば、教室や校長室などの窓辺を思わせます。それによって下五「豊かなり」の実感に違いが生まれてきます。私は、断然「雪うさぎ」がよいと思います。

雪兎にしては大きすぎはせぬか　　ざうこ

出来上がった「雪兎」というよりは、いま作っている「雪兎」なのでしょうね。「雪兎」を作ると言い張ってはいるが、どうみても可愛い「雪兎」にはなりそうもない雪の量。「大きすぎはせぬか」と呟いてないで、早くそう言ってやりなよ！とも思うが、そこがこの句の滑稽味だものね（笑）。

溶けぎはのときをあそべり雪兎　　大塚迷路

こちらは「溶け」はじめている「雪兎」です。「雪だるま」は溶けていくとただ残念感が強くなっていくのみですが、「雪兎」は飾られた盆の上で溶けてゆくさまをも愛でるものなのだと、気づかされます。「溶けぎは」という状態の「とき」を「あそべり」という擬人化に、切なさと美しさがまじります。

雪うさぎ眼を患ひてをりにけり　　きゅうもん@木ノ芽

「雪うさぎ」の「眼」に注目した句も勿論たくさんありました。が「患ひてをりにけり」は、その「眼」が取れているのか、歪んでいるのか、片目だけ傷のある木の実を使ってるのか。あるいは我が身を託した心情的なものなのか。何一つ書いてないのです。全ての読みを受け入れて、一句の「雪うさぎ」はポツネンとそこに置かれています。

雪兎ポポロ享年一夜半　　はむ

「ポポロ」は「雪兎」につけた名前でしょうか。「一夜半」で溶けてしまうことを「享年」と表現したか。あるいは、実際に飼っていた兎が「ポポロ」かもしれない、という読みもできます。溺愛していたウサギを思いつつ「雪兎」を作ったのかもしれない、と。「享年」という言葉がそんな印象を与えるのかもしれませんね。

時代劇シーン15の雪兎　　只暎

「時代劇」の撮影現場です。台本の「シーン15」には「雪兎」が置かれていて、それにまつわる台詞があるのでしょう。現場スタッフが、外の雪を使って「雪兎」を作りスタンバイしているのか。雪が降った日に作った「雪兎」が冷凍室から運ばれてきてるのか。いかようにも読めて楽しい。

雪うさぎ三ヶ月目のニューヨーク　　朝桜咲花

「三ヶ月目のニューヨーク」という措辞だけで、状況がほぼ分かります。経済効率のよい措辞ですね。やっと街に慣れ始めた「三ヶ月目」でしょうか。「ニューヨーク」という地名と季語「雪うさぎ」の取り合わせが明るくて、未来が開けてくるような一句。

教祖になる雪兎をこしらえる　　蟻馬次朗

はぁ?!「教祖」と吃驚！　可愛い優しい愛すべき「雪兎」の句が並ぶ中で、大いなる異彩を放っていた一句。「教祖になる」で切れる、つまり私か誰かが「教祖」になったと述べているのか、はたまた「教祖になる雪兎」と続くのか。どちらにしても怖いけど、案外ドラえもんの世界みたいな他愛ない話なのかもしれません。そんなこんなで、この句から逃れられなくなってしまいました（笑）。

同時投句には「秀爺作雪兎恐ろしや恐ろしや」というさらなるホラー路線もありつつ、「もぎたての雪のみづみづしき兎」というフレッシュな作品もあり、なかなか侮れない作家だなあ！と楽しみになってきました。

第210回　2019年1月28日週掲載

鮃（ひらめ）

《春》ヒラメ科の海魚。よく似た魚である鰈（かれい）とは、「左鮃の右鰈」といわれ、一般的には顔の向きで判別されているものの、例外もある。寒さが増す冬には脂がのって美味。

天

鮃とは武蔵野ほどの起伏なり　　蟻馬次朗

「鮃」をじっと見つめていると、その体表の緩やかなカー

ブが気になり始めます。丘陵をイメージさせる「起伏」という言葉はでてくるかもしれませんが、「武蔵野ほど」という比喩はちょっと思いつきません。しかし言われてみると、「鮃」の体の模様は冬の原野を思わせるような色合い。そして「武蔵野」の原野を思わせるようなだらかな「起伏」。二つの言葉「鮃」と「武蔵野」を結びつける「起伏」という比喩のなんと新鮮なことでしょう。カメラに喩えるならば、冬の「武蔵野」の遠景かと思う色彩と「起伏」が、実は「鮃」の体表をクローズアップした映像であったという驚き。「ほどの」から「～なり」と言い切る叙述の力にも脱帽いたします。

地

うらがはのやさし鮃は噛む魚　クズウジュンイチ

「鮃」の裏側を描いた句は沢山ありましたし、「鮃」の特徴である鋭い歯を詠んだ人たちもいました。「鮃」という魚を淡々と解説しているだけなのに、そこに詩が匂ってくる。不思議な味わいの一句です。前半が平仮名、後半が漢字。このあたりの選択もさすがです。

鮃去りしところ豊かに砂残る　一阿蘇鷲二

「砂」の中に身を潜めている「鮃」ですが、捕食のために動いた後の光景を見事に描写しました。「鮃去りしところ」ですから、そこにはもう「鮃」はいないのですが、後の残る「豊かな砂」を描くことで、そこにいた「鮃」を見せる。そこが巧い！

同時投句「砂幾つぶ鮃の息に動きけり」もよく観察しています。

考える砂や静かに鮃かな　卯MOON

「や」と「かな」、二つの強い切れ字は、俳句ではタブーとされていますが、微妙なバランスで成り立っています。「考える砂」は「鮃」が潜んで餌をとろうと待ち構えている「砂」です。「静かに鮃かな」は、砂と鮃が一体となって静かにそこに存在するさまを表現しています。

百トンの水を見上ぐる鮃かな　ちゃうりん

「鮃」の上にある「水」の重さをさまざまに述べようとした句はありましたが、「百トンの水」と嵩そのものを立方体のような述べ方をしているのが面白い作品です。「見上ぐる」という措辞が「鮃」という実体を描いています。

臓物も脳も鮃の幅の中　花伝

「鮃」の薄さは特徴の一つですが、それを「臓物も脳も」その「幅の中」に納まっているよという把握が面白い。「鮃の幅」という指摘が、一句のリアリティとなっています。「臓物も脳も」と畳み掛けてからの展開が巧いね！

よこたはる比目魚を月のぢつと見る　きゅうもん@木ノ芽

海底の砂の中にいる鮃が月を見上げている、という発想の句は思いの外多かったのです。が、この句は視点を逆にしています。「よこたはる比目魚」を「月」が「ぢつと」見つめているよ、というのです。「比目魚」もこの句の場合はいきています。

寒鮃子規は左に身を起こし　あめふらし

目が斜めによってしまっている「鮃」の貌と、病床にあった「子規」の顔写真は、どこか似ているなあと思います。思うように動くこともままならぬ「子規」は「左に身を」を起こして、何かを語りかけようとする。食べることが好きだった子規ですが、「寒鮃」を食べたことはあったのでしょうか。

食ひ了へし骨の形も鮃かな　亀田荒太

当たり前といえば当たり前のことですが、「鮃」だからこその小さな発見。「食ひ了へし骨の形」そのものが「鮃」の形そのままだよ、という愉快は、見事な箸使いの証でもあります。

第211回　2019年2月11日週掲載

うらううら

《春》春光を浴びて、あらゆるものが明るく気持よく見える様をいう。麗か。

天

うらうらと巣よりあふるるかやねずみ　あまぶー

「かやねずみ」調べてみました。【頭胴長54～79㎜、尾長47～91㎜、体重7～14gの日本では一番小さなネズミである】との解説。写真をみると絵本に出てくるようなネズミなので吃驚しました。さらにイネ科の葉を利用して作るという10㎝ほどの球形の巣ってのが、これまた可愛い。なるほど、この「巣」で眠り、出産や育児をするのだと思うと、「巣よりあふるる」という措辞が脳内で明確な映像を描き始めました。勿論、上五を「うららかや」としても成立しますが、「うらうら」は副詞ですから動詞「あふるる」を修飾。オノマトペのような効果を発揮しつつ、小さな「かやねずみ」の様子が臨場感をもって描かれています。「巣」のみを漢字にした表記も優しくて楽しげです。

地

うらうらぽかろんぽかろん羊追う　蟻馬次朗

「うららかや」ではなく、敢えて「うらうら」なのかという必然性を考える時、オノマトペ的な使い方もあるのではないか、と考える。そんな発想の句は他にもありましたが、この句は抜きん出ております。季語「うらうら」は副詞ながら、まるでオノマトペのような力を発揮。さらに「ぽかろんぽかろん」は季語を表現したオノマトペでありつつ、「羊」を追う人物の動作や心の表現にもなり得ている。これも「天」に推したい佳句でした。同時投句「うらうらとブラウン管のやうな空」の比喩が懐かしい空を思わせます。

日うらうら空は支柱がなくていい　神山刻

こちらは「日うらうら」。太陽のイメージが入ります。「空は支柱がなくていい」という措辞が気持ちよいことはいうまでもありませんが、「日うらうら」の音とリズムがこの日の「空」を明るく満たします。いかにも春の気分たっぷりの一句です。

にわとりに顔を覗かれ日うらうら　洋壬

居眠りしていたのか、考え事をしていたのか。「にわとりに顔を覗かれ」るという状況そのものがいかにも麗らか。「日うらうら」は太陽の気分が入ってくるので、「にわとり」の白がより明るく感じられます。同時投句「散歩して漂流もして日うらうら」も面白い。

うらうらと金魚交はる前の水　渋茶雷魚

「うらうらと～交はる」のですね。金魚の交尾そのものではなく、「金魚交はる前の水」も「うらうらと（存在している）」とも読めて、そのあたりの二重構造が巧いと思います。「金魚」は夏の季語ですが、「うらうら」がちゃんと主役となっていますね。

うらうらとあぶく頭上のマンタへと　一阿蘇鷲二

海の底にも「うらうら」があったか！と脱帽。「うらうらと（あがっていく）あぶく」という意味になりますね。海底から見上げると頭上を「マンタ」が悠々と泳いでいくのです。「頭上のマンタへと」のぼっていく我が酸素ボンベの泡もまた、「うらうらと」輝いています。

うらうらと永眠しますよう木魚　司啓

大往生のお葬式か、はたまた何かの魂を鎮めているのか。「うらうらと永眠しますよう」という願い（？）が、人を食っているようでもあり。最後に出てくる「木魚」の音がいかにも麗らかな春の音であります。

うらうらはちょっとホコリの味がした　シュリ

この使い方はちょっとずるいけど、「うらうら」という副詞そのものには「ちょっとホコリの味」がしてるみたい、という発想が楽しくて採ってしまいました（笑）。あたたかい「ホコリ」以外にどんな味がするのか、想像してみるとさらに楽しいかも。

うらうらとおうちこっくりさんのくる　けーい〇

「うらうらと～くる」のですね。私は「こっくりさん」なんてものに興味のない子だったので「うらうら」が似合ってるのかどうか分からなくてちょっと迷ったのですが、妖しいんだけどどこか明るさもある感じが、結構いいのかもしれない。平仮名ばかりの表記もなんだか明るい。女の子たちの恋の占いかもしれません。

うらうらとマカロンもって復讐へ　未補

「うらうらと～もって」ですね。「マカロン」の感触もなんだか「うらうら」してますが、最後の一語「復讐へ」のどんでん返しが愉快。「マカロン」で「復讐」できる相手って誰だろう、どんな「復讐」なんだろうと愉快な想像が広がっていきます。

第212回　2019年2月25日週掲載

菠薐草（ほうれんそう）

《春》アカザ科の一年生または二年生葉菜。カロチン、鉄分などの栄養に富み、様々な料理に用いられる。冬にもよく食されるが、季語としては春季となっている。

天

握力や菠薐草を甘うして　くらげを

「菠薐草」といえばポパイ！がすぐに出てきてしまう。そこを乗り越えて新しい発想にという考え方も勿論ありますが、誰もが思いつく発想とは、言い換えれば盤石の共通理解でもあります。それを味方につけて展開していく考え方もあるのです。この句は、ポパイ的発想から「握力」という言葉を選び取りました。上五「握力や」ともってくるのはかなり大胆。「菠薐草を甘うして」の解釈にも仕掛けがあります。握力をつけるために嫌いな菠薐草を甘く味付けて食べようとしているのか、食べさせようとしているのか。はたまた握力がついてきたことで菠薐草の力が益々信じられるようになり、味を甘く感じているのか。想像の余地を楽しませてくれる作品です。

地

菠薐草どこまでもゆける雲梯　　或人

ポパイ的発想から「菠薐草」→力こぶ→「雲梯」と展開。昨日の夕飯で「菠薐草」食べたから！　給食の「菠薐草」おかわりしたから！　今日は「どこまでもゆける」そんな気分の春の校庭です。同時投句「ヘルメットダサいほうれん草嫌い」も愉快。

羅刹日のことに法蓮草甘し　　比々き

「羅刹日」とは最悪の日。何をやっても最悪な日、いつもは苦手な「菠薐草」が「甘し」と感じるほどの、最低な気分なのか。「羅刹日（らせつび）」という響きが厳しく切なく、「菠薐草（ほうれんそう）」という響きが殊のほか甘やかに感じられます。

はうれんさうメランコリーという甘さ　　蟻馬次朗

「菠薐草」を歴史的仮名遣いで書くと「はうれんさう」。視覚的に随分感じが変わりますね。この表記と「メランコリー」という片仮名の対比も面白い。「はうれんさう」は苦くて、「メランコリー」は甘いのか。どちらも甘く感じられているのか。憂鬱に菠薐草が似合います。

腹に子のいる重力や菠薐草　　青海也緒

「腹に子のいる」状態を「重力」と感じとる肉体感覚がリアル。今食べている「菠薐草」は腹の子の生きる力となるのだよ、と思いながらしげしげと「菠薐草」を見つめているのかもしれません。「や」は「重力」を強調。力が漲ります。

生命線のまづしきカーブ菠薐草　　一阿蘇鷲二

我が手のひらをしみじみと眺めます。「生命線」がありはするが、なんだか貧相な「カーブ」を描いているなと思う。「まづしきカーブ」という詩語がいいなあ。「菠薐草」を食べても「生命線」はこのままなんだろうけど、生きる健気を思わせる一句。

はうれんさう無一文だが無尽蔵　　福蔵

「はうれんさう」が畑いっぱいに緑の葉を広げている様子を思い浮かべてしまいました。貧しい暮らしを「無一文」といいつつ、この豊かな「はうれんさう」は春の土から「無尽蔵」に生まれてくる。そんな充足感が感じとれる一句です。

菠薐草およそ冥王星の味　　伊予吟会　宵嵐

「菠薐草」が甘いと感じるのは、苦手意識のない人たち。やっぱり嫌い！という人たちも当然います。「およそ冥王星の味」という比喩＝詩的断定が愉快です。食べたことはないけど、太陽系から外されてしまった灰色の星＝「冥王星」は、きっと殺伐とした灰色の味なんだろうな。

ほうれん草キリスト生誕の匂ひ　　利平

「ほうれん草」が苦手という人は、独特の匂いを理由にあげます。それにしても「ほうれん草」の比喩として「キリスト生誕の匂ひ」だという発想に吃驚。崇高な、人類の役に立ちそうな、その始まりの「生誕」の生々しく苦く青いみたいな……、いろんなイメージがこの「匂ひ」に凝縮されているって感じなんだろうな。

菠薐草信者の母に逆らえぬ　　雪うさぎ

なんでもいいから「菠薐草」を食べていれば強く元気になれる、と信じ込んでいる「母」。毎日の食卓に「菠薐草」がでないことがない。そんな「菠薐草信者」なんでしょうね。「逆らえぬ」の下五に作者の溜息が見える一句です。同時投句にも共感！「まだ歌えるポパイのテーマはうれん草」

傷付くな私は強い菠薐草　　中山月波

「傷付くな」と言われても、人は傷付くのです。でも自分を鼓舞しなければ、今日を生き抜けない。「傷付くな」と私に呼びかける私。「私は強い」と自分に言い聞かせる私。「菠薐草」をモリモリ食べて、心をポパイにする。この句を、今日の私の応援歌にしたい。そう思った一句です。

俳句ポスト365 選者

夏井いつき プロフィール

1957年（昭和32年）生まれ。愛媛県松山市在住。8年間の中学校国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。俳句集団「いつき組」組長として創作活動&指導に加え、俳句の授業〈句会ライブ〉の開催、全国高等学校俳句選手権「俳句甲子園」の創設、「俳都松山宣言」起草にも携わるなど幅広く活動中。平成27年5月「俳都松山大使」に就任。平成29年4月から「帝塚山学院大学」客員教授。TBS「プレバト!!」俳句コーナー出演中。句集に「伊月集　龍」「伊月集　梟」、ほか著書多数。